

---

# 姫君は波乱万丈

浅葱恵莉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

姫君は波乱万丈

### 【Nコード】

N4654G

### 【作者名】

浅葱恵莉

### 【あらすじ】

今から二百年と少し前。將軍様に仕える老中『佐門』を祖父にもつ『百合』

はただ今思春期まっさかり(?)の十六歳。いつものように平和な日々をおくっていると、めったに顔を見せないはずの佐門が百合を訪ねてくる。

そして、百合はそこから將軍様の息子の正室になれとの命令を下されます。

とまどう百合ですが熱血な家族におされ、ムリヤリ城に行くことに。

そこから百合の波乱万丈な姫君としての人生は幕を開ける！

## はじまりの朝

今から二百年と少し前の話。

日本だけれど日本ではないどこかの国の物語。

ここに波乱万丈の人生をおくることになる女子おなごがいる。

いつしか乱世を生き抜き、国を導くこととなるだろう。

しかし、その女子はまだ自分の身におこることを

なにも知らないで眠っていた。

その瞼の奥には、何が見えているのか――。

その日はすがすがしい朝だった。

昨日雨が降った痕跡は消え去り、朝日がまぶしく輝いている。

その光は、木をつき抜け、木漏れ日となって大地に降り注ぐ。

ふと、優しい風が百合の花をくすぐって逃げて行った。

二月にしては珍しい、温かみのある日だ。

そんな命あふれる今日このごろ、一つの屋敷の中で、

「百合様、朝です！」

と、言った威勢のいいさけび声が障子をつらぬく。

すがすがしい朝は、あっけなくやぶられた。

廊下を、女が駆けている。

「トタトタトタ・・・」

はじめ、小さかった足音はしだいに、

「ドタドタドタ・・・」

と、だく点がつくまでになった。

その音にあわてて雀が二、三羽飛び立ち、  
直後に、

『バン!』

と、障子が荒々しく開けられた。  
カエルがあわてて池に飛び込む。

そこには髪をゆった体格のいい女が仁王立ちをして立っていた。

筋肉がもりあがったうでをまくしあげ、

横幅の広い胴回りを、帯がきっちりとしめている。

女はするどい目で、視線の先にあるもり上がったふとんをキツと睨みつけると、

「百合様、朝です!」

と、最初に言ったことをもう一度繰り返した。

百合と呼ばれた女は、もり上がった布団からもっそりと顔を出す。

クリっとした目に長いまつげ、色白のはだとツンとがった鼻。

百合はなかなかの女子だ。

「かんべんしてよ、お千ゝ私、八ツ半にねて、七ツ半におきたばかりなのよ!？」

一時しかねてないじゃない!」

しかし百合の訴えは聞きいらなかったようだ。

「くだらない計算をするひまがあったらはおきてください!」

お千はそう言うと、

「ボタン!」

と、またしても荒々しく障子をしめた。

「フン・・・おせっかいババア・・・」

ぼそっと百合は布団の中で呟いた――つもりだった。

「何かいいましたか!？」

二秒後、鬼のような形相でお千が飛んで来る。

「げっ・・・地獄耳・・・」

「いいかげんにおっしゃい!」

バボーン!と、障子がしまった。と、思うと天井から、

『ピシッ』

というにぶい音がする。

百合はこのままいくと、家が崩壊してしまう気がして、ため息をつく。

だが、百合の家はここらではみかけないほどの豪邸だ。壊れることはまずないだろう。

なにしろ百合は、將軍様につかえる老中、

『佐門』の孫だった。

『老中』といえはこの時代、そこらの人々はほぼ全員膝をつくほど身分は高い。

「ふああ・・・」

百合は一アクビした。

「さてと、もう少しねるか・・・」

その時、

「百合、何をしておる、早く起きてこんかあ！」

いくつもの部屋を突き抜けて、聞きなれた声が飛んできた。

百合はしぶしぶ立ち上がる。

（日常茶飯事・・・）

## はじまりの朝（後書き）

初めまして、浅葱と申します。

『姫君は波乱万丈』第一話を読んでください、ありがとうございます。

この作品は私のデビュー作でもあります。

文章表現はまだまだ未熟ですが、楽しんでもらえるように頑張りたいと思います！ぜひ、感想や指摘などがありましたらバンバンお寄せください。

## 朝日は真実を告げる

「まったく・・・人が眠ろうとしている時に・・・そんなに私をいじめたいわけ!?!」

声の主に文句を言いながら百合は渡廊下をらんぼうにかけぬけた。

「何ですか、父上!?!」

スパーンと、父上の部屋の障子を開ける。

「何ですか、じゃないわああ! すなおに起きてこんかあ!」

「なによ! 私はねえ、これ以上おきていたら死んじゃうのよおお!」

この状態で百合が死ぬことはまずない。

一怒鳴りして体力を使い果たした百合はざぶとんにしかめつつらで座る。

父上も百合の向かいに腰をおろした。

「いいか、よく聞け。今日はなんと・・・」

父上が真顔で口をひらく。

「佐門様がいらっしゃるのだ!」

数泊の沈黙。

「ええ!?! おじいちゃんが!?!」

百合は目を見開いた。

と、いうものの百合は佐門の顔をおぼえていない。

何せ最後に会ったのが十二年も前のことだったからだ。

「とにかくだ百合」

父上が一つ咳払い。



「今日は佐門様のいらっしゃる大切な日！ 何をしに来られるかは知らんが、

百合の、そのみずばらしい服とバクハツしたゴミのような髪を直さなくてはならん！」

父上の言葉がグサグサと刃物のように百合の心の中に突き刺さる。

「みずばらしいってねえ・・・」

百合が怒りのあまり拳をにぎりしめると、

「さあ、百合様これにおきがえください！」

どこからかお千が現れると、甘い声で微笑む。

お千が手にしている物を見て百合はトリハダが立った。

それは赤い布地に真っ黄色なひまわりの花と、むらさき色のスマレがついた、

なんとも悪趣味なデザインの着物。

（こいつらにはセンスというものがないのかっ！！）

百合は心の中で絶叫しまくった。

（ここにいたら殺される・・・）

そう思った百合は、無意識のうちに障子をあけて部屋をとびだす。

「まっ・・・またんか百合！」

「まったく・・・あんな着物だれが着るもんですか！」

父上とお千の『大搜索』をのがれて、庭の塀の上によじのぼった百合は、ふうっとため息をついた。

ふと、頭上を見つめる。

「あゝ空は青いな」

上の空で歌を口ずさんでいると、

『ツルッ』

という高い音がした。

百合はや々な予感がした。ぐらっと重心がかたむく。  
この間わずか二秒。

『ヒュウウウ』

耳鳴りが聞こえる。

「こゝれゝはかくじつゝにおちてるゝ♪」

作曲、作詞、百合。おちてるの歌。

『バキッ!』

塀の上から無残に落下・・・完全なるバカである。

「いたたた・・・」

百合はうめいたが、その下からも、

「ううう・・・」

といううめき声がした。

「!?!」

百合はびっくりして飛びのいた。

するとそこには、

『光る頭』『しわくちゃの顔』『たぶん人間』

というものがあおむけにころがっている。

(だれ!?)

本日心の中で二回目の絶叫。

「おお、佐門様! これはどうしたことか!」

父上が渡り廊下を小走りでやって来た。

へ? ちょっとまって・・・今、佐門様って言ったよね・・・

じ、じゃあこのしわくちゃのバケモノが私のおじいちゃん・・・

百合の頭の中で、

『理想のおじいちゃん』

の図がむざんにもくずれおちたのだった。

ガックリと肩を落としていると、

「また百合がなにかしよったな!？」

父上がするどい目で百合を睨みつけた。

「いやいや、いいんじゃないよ、ひさしぶりに百合に会えたんじゃないから。」

佐門は弱い声だ。

体調が悪いのかと勘違いした父上はお千を振り返る。

「お千、お通ししなさい。」

お千はニツコリと笑った。普段とは違う笑顔だ。

「さあさあ、佐門様、どうぞこちらに!」

声も、いつもとは違う猫なで声。

「……。」

百合はさっきから感心しまくりだ。

（お祖父ちゃん《さもん》はここまでお千や父上を変えることができるのか・・・さすが老中。）

何か違う気がするが・・・

父上の部屋についた佐門はドサドサと荷物をおろしはじめた。

百合、父上、お千の三人は、静かに腰を下ろす。

「で、今日は何用でこちらにまいったのですか、佐門様。」

父上はおちついた声で問いかけた。佐門がポリポリと頭をかく。

「今日はじゃな・・・百合のことだまいったのじゃ。」

サツと家族中（といっても二人だけだけど）の視線が百合にあつま  
る。

「へ？私？」

百合は自分を指差した。何の用だろう。

「將軍様からのご命令でな。」

その一言で百合の心の中は花火大会になった。

（た、たまやゝかぎやゝ!）

將軍様が百合に直接命令するなど今まで一度もなかったことだからだ。

「な、なんと・・・」

それは、普段冷静な父上でも表情を変えたほど。

「將軍様の子供、綾尉様は今十七歳。百合は十六歳。」

佐門のしたたかな言葉に自然と百合達は首を縦にふった。

「そこで・・・」

父上とお千がゴクツとつばをを飲む。

「百合を綾尉様の正室にしろ。」

「・・・・・・・・・・は!？」

頭の中が真っ白になった。

## 朝日は真実を告げる（後書き）

プチ設定で、『佐門はドライアイ』というものがありませんが・・・。

星空の下で思いは結ばれ

「...」

百合は混乱しまくった。頭は花火大会を通り越してダイナマイト並だ。

「さつき言つたとおりじゃ。百合を將軍様の息子、綾尉様の妻にすると。」

佐門は、ハツハツハツと笑った。

「たのまれたのじゃよ。そちの身内に良いやつはおらぬかと、將軍様にな。そしたらまたまた百合に行き着いたのじゃ。」

佐門は、たまたまといふところに強調した。

（たまたまですって!?!? そんなもんで私の人生くるわすんじゃないわよ!?!）

泣きたい気分だ・・・

さらに、おいうちをかけるように父上が身を乗り出す。

「で……嫁入りの日はいつなのですか!？」

（父上まで一っ！私、嫁入りするなんて一言も言っていないじゃない！）

百合は今、バクハツする気持ちをなんとかおさえつつ、ぎぶとんの  
上に

座っている。

「嫁入りの日は・・・一ヶ月後じゃ！」

扇を振り回す佐門。コイツ大丈夫か？

だが、この一言がきめてとなり、

「あらあらまあ！すぐに嫁入りの準備をしなくては！」

「嫁入り道具の準備からだ！」

と、百合をほったらかしにして、父上とお千はあわただしく部屋を出て行ってしまおう。

「ちよっ・・・私嫁入りなんてしない・・・」

百合は講義したが、父上に、

『んなもん知るか！おまえは嫁入りするんだ！いいか！？』

という目つきでにらまれ、何も言えなくなった。

一人残った佐門も、

「城でまっっておるからな！」

と、言っ**て**百合の頭をなで、部屋を出て行**った**。

こうして百合は、自己中心的な家族におされ、

ムリヤリ嫁入りするハメになったのだ。

「・・・最悪」

誰もいない部屋で、百合はポツリとつぶやいた。

嫁入り前夜の**日**。

「どうした？暗い顔して」

一人の少年が家の門の前でうずくま**っ**ている百合に声をかける。

辺りは夕暮れ。烏の鳴き声**が**寂しげに聞こえる。

「撒さん・・・」

撒と呼ばれた少年はにっこりと微笑んだ。顔立ちはまだ幼い。

ゆっくりと百合の隣に座る。

百合は口を開いた。

「私・・・將軍様の息子の綾尉様に嫁入りすることになったの・・・」

「へ・・・？　へえええええええええっ！？　ね・・・姉さんが・・・」

！？」

撒は、やたらめったら『え』を連発した。

「しーっ！大声ださないで！」

百合は撒の口をふさぐ。

「ご、ごめん姉さん・・・」

撒は百合より四つ下で侍と、けして高くない家柄の息子だった。昔から気の合う百合の弟的存在で、撒は百合のことを

『姉さん』

と、呼んでほしい、尊敬している。

「じ、じゃあ姉さんこの土地をでてかなきゃいけないじゃ・・・」

「そうよ。明日、この屋敷を出に別れを告げなきゃいけないの。」

そう言って百合は顔をふせた。

「・・・」

それをだまって見つめている撒。

ふいに、撒は思い出したように手を打った。

「じゃあさ・・・姉さん、ついてきて！」

立ち上がった撒は百合の手を強くぐいっとひっぱる。いつのまにこんな力強くなったんだろうか。

「？」

百合はぐいぐいひっぱられて、もうすっかり暗くなった森を歩いた。夜風が頬をなで、消えていく。どこか不気味さを漂わせた。

「ち・・・ちよっと、屋敷からずいぶんはなれてるわよ！？」

「へーきへーき、もうすぐだ！」

葉っぱをおしのけて出た先は、屋敷から見える小高い丘のてっぺん。

「・・・・・・・・！！！」

そこは一面の星空だった。

キラキラと光輝く宝石のような星が、空一面にちらばっている。



「すご・・・」

百合は星空を見上げてつぶやく。

「ここは最近見つけた絶好のスポットなんだ！」

撒はそういつてニカツと笑った。

「最後に姉さんと見られてよかった・・・」

そう言う撒の目にはうっすらと涙がうかんでいる。

それに気づいた百合は、

「バカ！」

と、言って撒の頭をぽこっとなぐった。真剣な瞳だ。

「男なら泣くな！」

百合にそう言われた撒は、無理やりいつもの笑顔をうかべる。

だが、帰る途中、百合の頬をうっすらと涙がつたっていたのを、撒はまったく気づいていなかった。

翌朝、百合をのせた小さなかごは、

ひっそりと家を出て行ったのである。

## 出会いに心は揺らぐ

辺りは、一面の星空。

『すご・・・』

『ここは最近見つけた絶好のスポットなんだ!』

『最後に姉さんと見られてよかった・・・』

『バカ! 男なら泣くな!』

「・・・り・・・」

誰・・・?

「・・・ゆ・・・り・・・」

誰!? 誰なの——!?

「百合様!!」

ハッ、として我に帰った。

さっきのは夢・・・?

「大事ありませんか!? うなされていましたけど・・・?」

「え、ええ・・・平気です・・・」

百合は籠の外から心配そうに覗くけむくじゃらの男（なにげに失礼）に告げた。

（そうだ・・・今私は城に向かう途中・・・）

辺りは山々に囲まれた道。鳥の鳴き声をはっきりと聞こえる。

そう思い、気がついた。目の下がうつすらと濡れているのを。

（私、もしかして泣いてた!?!）

それに気づいた百合は自然と顔が赤くなる。

（こ・・・こんなのただのあくびで目がうるんだだけよ!）

百合はそう思い込み、自分をおちつかせた。

(でも・・・)

眉にしわをよせる。

(私はもう家に帰れないんだ・・・綾尉様の正室になるんだ・・・)  
そう思うとなんだか目がしらが熱くなってくる。

「・・・っ！」

「百合様、見えましたよお城が！」

急に男が顔を出した。声がやたらとはずんでいる。

「わわわっ！」

涙はあっさり引っ込んだ・・・

「少し、休憩といたしましょうか？」

「は・・・はい！」

百合はせまい籠の中から抜け出し、外の空気を胸いっぱい吸い込む。

視界に入るのはのどかな森で、農民達がときおり通りかかる。  
もう屋敷がある『松重』地方からはだいぶん離れたようだ。

「ふうやっぱり外は気持ちいな〜」

どっころしよっと、百合はそばにある岩に腰をおろした。

そしてまたしても百合が鼻歌を歌っていると、

『ズルッ』

と、いう低い音が・・・

「ま・・・まさか・・・また・・・」

百合の予想は当たっていた。

上半身がかたむき、視界がぶれる。

「これはまゝたゞしておちてる」

作曲、作詞、百合。またしてもおちてるの歌。

(今度こそ死ぬっ!!)

と、百合がかたく目を閉じた時だった。

何かが百合の体をやさしくつつみこむ。それは生まれた時から知っているような心地よさ。

「!？」

おそろおそろ目を開けると・・・

「大丈夫？」

そこには一人の青年の顔があった。

「へ？」

百合は一瞬なにおきたのか分らない。

目をパチパチさせる百合に、青年は微笑んだ。

「それにしてもびっくりした・・・なにげに空を見上げたら君があそこの高いガケから降ってきたから・・・」

(そ、そうか・・・私ガケからおっこちて・・・)

すべてを理解したら、改めて青年の顔をまじまじと見てみた。

青い瞳と、風になびく髪、すっきりした頬と、とがった鼻。

こんなに整った顔はほかに見たことがない。

ふとあることに百合は気がついた。

(ひょっとして私、今・・・抱きしめられてる!?)

それに気づいた百合は顔がみるみる真っ赤になった。自然と心拍数も上がる。

「ん、どうした。顔が赤いぞ？」

青年は笑いながらそう言うと、百合の体をポンと放した。笑顔も殺人的な美しさだ。

「百合様ー!!? 大丈夫ですかー!!?」

途端に数人の護衛が走ってくる。それを横目で見た青年は踵を返す。

「じゃあ僕はいくよ、気をつけてね。」

彼はそう言い残すと歩き出した。

「あ・・・あのっ・・・あなたの名前は!?!」

百合はうろたえながらも聞く。みごとにカミカミだ。

「僕? 僕の名前は蒼<sup>そう</sup>。」

蒼は少し不審そうに答えた。

「蒼・・・様・・・」

キュッと両手を握り締める。そんな百合に護衛達は声をかけた。

「百合様、心配したのですよ!?! 籠にもどりましょう!」

だが護衛達の声はとどいていない。

「蒼様・・・」

マンガなら百合の目はハート型になっているだろう。

そして籠に揺られている時も百合はずっと、

「蒼様・・・私の蒼様・・・!!!」

と、呟いていた。

「ぐぶぶぶぶぶぶぶぶ・・・!」

「なあ・・・百合様大丈夫か・・・?」

「さあ・・・落ちたときに変なトコでもうったんじゃないか?」

外で籠を運ぶ護衛たちがささやく。

だが、百合がうかれていられるのもそこまでだ。

城は目と鼻の先。

目の前には鬼のように大きな城が、百合を飲み込もうとまちうけている。

「これが・・・城・・・」

表情を変えた百合は聞こえないような小声でそう呟く。

いよいよ——この時が来た。

**城の中で交差するキモチ（前書き）**

やっと百合が綾尉と会うことに・・・！

## 城の中で交差するキモチ

「百合様の、おなーりー！」

たくさんの人々が百合に向かっていつせいに頭を下げた。

「・・・・・・・・。」

こういう場合って一体どうしたらいいんでしょうか・・・

「百合様！ なにをぼーっとしておられるのですか！ はやくこっちへ！！」

一人の女中が厳しい目で百合を睨む。

まったく・・・これだから城は苦手だ・・・

女中に案内されてやってきたのは、城の中にある大広間だった。

たくさん視線を感じながらも百合は大広間の中央に腰を下ろす。

「では、綾尉様のおなーりー！」

おっといけない。綾尉様との初対面なんだからもつとにこやかにしてないと・・・

やっぱ第一印象は大事よね！

百合はメチャクチャ無理やり笑顔を浮かべる。

顔の筋肉が痛い。

と、ムダな行為をしまくっていると、一人のハデな着物を着た男の人がやってきた。

（あれが綾尉様・・・）

綾尉がゆっくりとこちらを向く。

百合は目を見開いた。

（おおおっ！ な・・・なかなかの人じゃないの・・・！）

百合の頭の中に一輪の花が咲いた。



意志の強そうなキツとした目。ほっそりとした顔立ち。つややかな唇。

綾尉は今でいう『イケメン』だ。

（あ、でも城に行く途中に会った蒼様のほうが・・・）  
思いかけて、百合はハツとした。

（いけないいけない、私は綾尉様の正室になるんだから！）  
そう言って百合は首を横に振りまくる。他人から見るとかなり変な奴だろう。

その時だった。

「綾尉様につかえる蒼でございます・・・」  
一人の青年がゆっくりと頭を下げる。

その青年を見て百合の目玉は三十センチ先まで飛び出した

（あ・・・蒼様・・・！！！！）

そこにはまぎれもなく城に行く途中に出会った蒼がいた。

（綾尉様に仕えるんだ！やったー！）

そう思って百合はまた、

（いかんいかん・・・私は綾尉様の妻・・・）

と心の中で無理やり自分をおちつかせた。

そして、紹介は進む。

「私は百合様につかえる夢津美でございます。よろしく願いします。」

百合のすぐそばで感じのよさそうな女中が頭を下げた。

（この人が私につかえるんだ・・・）

ふっくらとした体の夢津美はどこなくお千と似ている。

その夢津美を最後に、紹介は終了。

「では、紹介がすんだので私どもはこれで・・・」

蒼がそう言のを合図に、辺りにいた人々はぞろぞろと部屋を出て行く。

「あ・・・ちょっと・・・」

人々のどさくさにまぎれ百合は蒼に話かけた。

「なんですか？」

蒼は視線だけで百合を見る。

「あの・・・私のこと覚えてます!？」

百合は顔面真っ赤だ。

ところが、返ってきた返事は以外なものだった。

「? へんなこというんじゃないやありません、百合様に会ったのは初めてです。」

蒼はさっさ部屋を出て行ってしまう。

「・・・」

百合はその場に固まった。半分放心状態で。

「はじ・・・め・・・て・・・?」

見間違えるわけがない。あれはまぎれもなく蒼だったのに。

(ひょっとして、双子とか?)

そう考え、数秒後百合は気づいた。この部屋に綾尉がいたことを。

(・・・き・・・気まずい・・・)

その視線はたしかに百合をとらえていた。

(こ、ここは人間の基本、あいさつしかないっ!)

百合の瞳に炎がともる。

「あ・・・あの・・・綾尉様、これからよろしくおねがいします・・・」

とりあえず百合は頭を下げた。  
だが、

「へッ、いいこぶってんじゃねえぞ!」

綾尉は顔に似つかず暴言をとばしまくる。

「・・・・・・・・。」

百合はなにが起こったのか分からなかった。

だが、すぐに正気に戻る。

「な・・・なんだとお!!!!!! てめえそれでも將軍の息子かああ

!!! あん!?!」

綾尉の数百倍ある声でとなりまくったのだった。

そして、その夜のこと。

「ねえ・・・あの新しく入った百合ってヤツむつかない?」

「そうそう・・・綾尉様の正室のくせに蒼様になれなれしいし・・・

」

数人の女中の影が不気味な月明かりに照らされて浮かび上がる。

「少し、痛い目にあわないとわからないようね・・・」

深い闇の中で、数人の女中がニヤツと笑った。

## 狩り時は切なく

「うーん・・・」

百合は渡り廊下に立って大きく背伸びをした。

いよいよ城での生活、一日目の朝だ。

城の朝は気持ちがいい。まぶしく輝く朝日、キラキラと光る庭の池の水面。<sup>みなも</sup>

そしてなにより父上の怒鳴り声を浴びなくてもいいからだ。

「あら、百合様もうお目覚めですか？」

振り返ると夢津美がいた。夢津美は百合に使える女中だ。

今日もあいかわらずニコニコと『平和オーラ』を出しまくっている。その両手には木箱を抱えていた。

「あれ？その大きな箱はなんですか？」

不思議に思った百合は、夢津美がかかえている木箱を指さした。

「この木箱でございますか？ なんでもこの箱は女中のお凜様が百合様にわたすようにと・・・」

「ふーん・・・なんか妙ね、こんなでっかい箱に・・・」  
そう言いながらも木箱を受け取る。

「一度あけてみてはいかがですか？」

夢津美がそういったので、百合は、

「そうね」

と言って木箱に手をかけた。

「あ・・・あけるわよ・・・！」

「よ・・・よろしいですよ・・・！」

自然と二人の言葉が震える。

「ええいっ！！」

百合は思い切って箱を開けてみた。

「え・・・」

そこに入っていたのはカラフルな料理。

「何これ・・・鯛のおかしらつきに白はん、海老のてんぷらに野菜の煮物・・・」

「お凧様はなんのためにこれを送ってきたんでしょうね？」

不思議そうな顔の夢津美の隣で、豪華な料理を見てゴクツとつばを飲み込む。

「一個食べちゃえ！」

海老のてんぷらを口の中にほうりこんだ。

「!!!!!!」

その場にうずくまる百合。

「ど・・・どうされたのです！？ 百合様!!」

夢津美はあわてて百合の顔を覗き込む。

「か、からーい!!!!!!」

「・・・へ!?!」

夢津美の目が点になった。

「いいからほら！ 食べてみて！」

百合に差し出された料理を夢津美はぱくりとほうばる。

「!!!!!!」

「ね!?!? そうなるでしょ!?!」

夢津美は深呼吸をし、おちついてから一怒鳴り。

「ゆるませーん!!! 百合様にこんな料理をおくりつけて!!!!!!」

「私、お凧のところに行ってくるわ！」

百合は険しい目つきで渡廊下をらんぼうに走った。

「あ、まってください、百合様！」

「あら、なにか音がするわね・・・」

髪をとかしながらお凜が呟く。

「音？」

由紀は首をかしげた。髪に飾られた簪が揺れる。

「ホラ、聞こえるでしょう？ 渡り廊下から・・・」

二人は耳をかたむける。

『ドドドドドド』

「本当ね・・・」

『バンッ!』

由紀が呟くのと同時に障子が開いた。

「お凜殿! どういうつもり!?」

「こんな料理を百合様によこして・・・!」

箱をもった二人はお凜にくっつかかった。

「フン、まんまとひっかかって、バカね・・・」

「え!?!」

その時、なにかが百合の横を風のように通りぬけた。

「うっ・・・」

夢津美がドサリと床に倒れこむ。

「な、なんてことを!」

百合の横を通りぬけたのは由紀の握り拳だった。

「じゃまものは、始末するまでよ。」

にぶい音がした。お凜が刀をぬいたのだ。

「!?!」

刀が百合に向かって振りおろされる。

百合が立っていた後ろの障子が破れた。

「仕留めたか？」

しかし、百合はその場にいない。

「ど、どこに消えた!？」

次の瞬間、フワッと百合が慌てるお凜の横に舞い降りた。

百合は宙を舞っていたのである。今まで撒とやっていた『戦ゴッコ』で身に着けた技だ。

「ここよ。」

そういうと百合はお凜の手をたたき、刀を床に落とす。

「くっ・・・!」

お凜はくやしさに満ち溢れた顔で後ろの戸を振り返った。すると、数人の女中が出てきて百合をはがいじめにする。

「あ、あんたたちなにすんのよ!」

百合は必死に抵抗したが、腹にこぶしを入れられ意識を失ったのである。

「こ、ここはどこ!？」

目が覚めた時、百合はカビが生えたたうす暗い倉庫の中にいた。かびくさい臭いが百合の鼻を包み込む。

「・・・っ!」

ふいに、お凜の声が響く。

「ここは今は使われていない倉庫よ。だれも助けになんかこないんだからね!」

「え・・・まさか私、とじこめられた!？」

百合はあせった。出口などどこにもない。

「さようなら、おろかな姫君さん!」

お凜はそう言っていると、遠ざかっていってしまふ。

「あ・・・ちよっ、ウソでしょ!？」

一人のこされた百合は思いつきり叫んだ。

「誰か助けて——っ!!」

しかし、その声はさびれた木にすいこまれ、外に聞こえることはない。

倉庫の中で、百合はガツクリと膝をついた。



**狩り時は切なく（後書き）**

百合、いきなりピンチです。  
若いのに大変だなあ・・・  
（遠い目）

## 赤い炎は陽炎のように揺れて

「こ……こんなことってあり!?!」

暗闇の物音一つしない倉庫の中で百合はへなへなと地面に手をついた。

「そりゃ私、蒼様に話かけたけどそれだけで牢の中……」

やっぱ蒼様にかかわらないほうがよかったのかも……

百合はそう思ってハハハ……と笑った。

だれもない倉庫の中で。

「って落ち込んでる場合じゃない!今はここからでなきゃ!!」

百合はそういつて着物の腕を思いっきりまくしあげた。  
でも。

この状態でどうしろというのか?

倉庫は丈夫そうだし窓なんておろか、暗闇でなにも見えない。

「……」

理解に苦しむ百合。

だが、しばらくしていると遠くで声がした。百合はそれを捉える。

「……ここに……ま……き……を……」

誰かいる!よし、息を吸って……

「助けて——!!!!」

百合の大声は暗い倉庫の中で反響した。

しかし、相手からの反応はない。

ん?ちよつとまでよ……

百合はその昔、佐門に言われたことを思い出す。

『よいか百合。ことをおこすときはまわりの人間が自分を信じているものか』

たしかめてからやるのじゃ。もし、信じるものがおらぬそのときは百合はあの世ゆきだぞ・・・？心しておくのじゃ！！』

あの声の主が味方だとはかぎらない。

そうすると自分はどうなるのか？

百合の白い頬をツーと汗がつたる。

「ま・・・まあ声の主が敵ってことはまずないでしょ！きつと私をさがしにきてくれた人よ！」

どこまでもポジティブ思考な百合。現在十六歳。

でもひっかかるのは遠くから聞こえたあの言葉。

『・・・ここに・・・ま・・・き・・・を・・・』

まきをつかうってことは火を熾すということ。

でも、外で燃やすものなんてあったかな？

そう思って百合は気づいた。

辺りの気温が上昇していることを。

「ま、まさかとは思うけど・・・」

『ボッ！！！！』

「キャ————！！！！」

隣の壁から赤い、恐ろしい炎が飛び出した。

外にいるお凜が火を放ったのだ。

煙が辺りを囲む。

「くさっ！！」

百合は目を細めて咳こんだ。

あわてるな自分！！たしか学校で避難訓練したし・・・

（上の文はどう考えても作者の遊びです。本当にありがとうございます。）

頭をスーパードル回転させる。

たしか煙は下に行くはず!!

ここで百合は人生最大の間違いをした。

そう。煙は上へ行くのだ!!!

でも百合はそんなことは知ったこっちゃない。

大きく背伸びをし、息をけんめいに止めて少しづつ前進する。

他人から見ればただのバカである。

数分後やっと異変に気づく。(遅い!)

「おかしい、上にいるはずなのになんだか気持ち悪い・・・」

もう一度言う。

煙は上に行くのだ!!

そしてとうとう百合はその体をゆっくりと傾け、床に倒れこんだ。  
遠くから声がする。

「百合——っ!!!!」

誰・・・?

百合は炎に飲み込まれていく。

気がつくと、あたりは真っ白だった。

空も海も森も林もなにもない。

そこに百合は一人立っている。

もしかして、ここが天国っていうところ?

私、死んだ!?

まだやり残したことがたくさんあるのに。

フツ・・・桜の花びらが散るころ、私もその命を共にし・・・

勝手に妄想していると、誰かに腕をつかまれた。

「え・・・」

目を開けると視界には綾尉。

バックは蝶の掛け軸がかかった百合の部屋。

そして百合は布団の上。

「私、死んでない!」

喜んだその時、

パッカーンと、綾尉に頭を叩かれた。

「何すんの・・・」

布団から起き上がると、綾尉はその小さい体を抱きしめた。

綾尉の髪が顔にかかる。

「!？」

百合の顔はたちまち真っ赤に。

「私がどれだけ心配したのかと思っているのだ!!」

「え・・・」

「燃える倉庫の中からそなたを助けたのは私なのだぞ!」

じゃあ最後に聞こえたあの声は綾尉・・・

(けっこういいところあるんだ・・・)

百合は抱きしめられながらそう思った。

最初のあの性格が悪い綾尉とは別人だ。

「夢津美もそなたをたいそう心配しておったぞ。」

夢津美・・・助かったんだ!

「とにかく今回のことは私が片付けておく。」

綾尉は百合を静かに放す。

「百合・・・まずはゆっくり休め。城は色々あるからな。」

綾尉の微笑に、百合の心臓は音を立てたのだった。

「フフ・・・あの口説き下手な綾尉様にしてはなかなかやるじゃない。相当心配だったのね、百合様が・・・」

夢津美は障子の外でクスリと笑う。

それは、赤い夕日が城を照らす夕暮れの出来事。



## 赤い炎は陽炎のように揺れて（後書き）

百合と綾尉の距離が少しちぎまりました。

いやあめでたいめでたい！（のか？）

ん？さてよ、もうネタがない。

作者、チーン・・・ダメじゃん・・・

## 年明け間近の判じ物（前書き）

作者注）半分遊びで書き上げました。（おい）  
「ありえん！」という場面もありますが、そこはスルーしてください。



## 年明け間近の判じ物

あの蒼をめぐった事件から二ヶ月がすぎた。

今日は十二月三十一日。

いわゆる「大みそか」である。

そのため、城の中は外が雨降りなのもかまわず大忙しだった。

「お湮さん！障子をはずして！」

「はい！」

「多美さん！茶室のお掃除！」

「わかりました！」

女中たちがドタドタと走りまわり、あたりはよけいにホコリが舞っている。

そんな中、百合は畳にねっころがっていた。

「あゝあゝひまねえ・・・」

百合はそう言って頭をボリボリかく。

朝おきたばかりの百合の髪はボサボサだった。

この状況を見て姫君だと思ふ人はまずいない。

「夢津美は掃除してていそがしいし・・・」

百合はそう言ってピンときた。

「そうだ、城の中を探検してみよっかな」夢津美もさそって・・・」  
百合はまだ城の内部を全部を見たことはない。探索がわりにいってみるのも悪くないだろう。

「フンフン、思いたったらすぐ実行！」

半分音がはずれた自作の歌を歌いながら障子を開ける。

夢津美の休憩している時間をねらって廊下を駆けた。

（決してストーカーとかではありません）

「夢津美くー！！」

廊下でぞうきんを絞っている夢津美に声をかける。

夢津美はすぐさま百合だと気づき、ハッと振り返った。

「なんですか？百合様。」

百合はニヤッと笑う。

「城の中を探検しに行かない？」

「・・・へ？」

夢津美の目が点になる。

「だからあ・・・」

百合は上から目線でくわしく説明した。

「え・・・でもそんなことをしたら佐門様にしかられますよね？」

あきらかに行きたくないというのが見え見えだ。

夢津美は感情が言葉に出るタイプだな、とすかさずチェック。

「行きたい、行きたい、行きたい！！」

だが、百合はだだっこのように手足をばたつかせた。

「・・・しょうがないですねえ・・・」

夢津美が頭に手をあてたのを見て百合はニマッと笑った。

「じゃあさっそく準備よ！」

廊下を駆けて行く百合を見て夢津美は思った。

（やれやれ・・・とんでもない姫君様ですね・・・）

☆

「・・・ってなんで天井裏なんです——！？」

「シュー——ッ！気づかれるでしょ！」

城の暗い天井裏を横切る影が二つ。

夢津美はよつんばいになってハアハア言っている。

「いいじゃない！このほうが探検らしくて。」

百合は楽しそうにどんどん進んでいく。

「こ・こ・これじゃあ私たちドロボウですよ」

だが百合はおかまいなしに天井の板をはずして一つずつ、部屋をのぞいた。

政治をやっている部屋。

老中たちが一生懸命書き物をしている部屋。

女中が箒をもってあわただしく動いている部屋。

おいしそうな料理を煮込んでいる部屋。

百合はそのすべての様子を目をかがやかせて覗いた。

「私の見えないところでこんなことが行われてるんだ・・・」  
さすが城ね！という百合を、夢津美は心配顔で覗き込んだ。

「そ・そ・そろそろ帰りましょうよ・・・百合様のお着物が真っ黒に・・・」

「まっつゝあとこの部屋だけ！！」

天井板をはずして百合は最後の部屋を覗いた。  
だが、そこは真っ暗でなにも見えない。

「あれ？」

「ゆ、百合様」

夢津美は止めるが百合が聞くはずがない。

「たしかここにろうそくと火打石がっ・・・」

すぐさま夢津美をつれて部屋の中に飛び降りた。  
これも撒と遊んでいた時に身に着けた技だ。

「な・・・何ここ・・・」

そこは、家具や置物がまったくない部屋だった。  
ただ、真ん中にポツンと一つ箱があるだけだ。

「私もこんな部屋初めて見ました・・・」  
ボヤツとした明かりの中、夢津美は呟く。

「真ん中にある箱を開けてみない？」

百合はそういつて箱にかけよると、箱に手をかけた。

「!？」

そこには一枚の古ぼけた和紙があった。

すっかり茶色くなっていて、ボロボロだ。

「な・・・？」

紙を手取る百合。

しばらくの間、百合は蠟燭を近づけ紙を読んでいる。

「あの・・・その紙にはなんと・・・？」

夢津美が問うと百合は、

「夢津美・・・！これ、判じ物だ——!!!!」  
あんこ

と、叫んだ。はっきり言って煩い。

「え・・・!？」

「ほらこれ！」

百合が夢津美に見せた紙には、やたら達筆でこう書いてあった。

『えたいやいきけなとまほんえやよむゆれ  
れよむよなうを。 一つ下』

「????？」

「さっぱりだ・・・」

「この一つ下ってのはなんでしょう・・・？」

すぐさま二人は判じ物解説にかかる。

「あ・・・！」

数分後、夢津美が声を漏らした。

「分かったの!？」

「た・・・たぶんですけど・・・!」

夢津美は紙を手にとった。

「この一つ下ってというのがカギなんです。

この文を五十音順の一つ下の文字にずらすと・・・」

「たとえばこの最初のえの字は、しの字になるってこと?」

「そうです! そうやってこの文をよむと・・・」

百合は頭をフル回転させて文字を読み取った。  
すると・・・

『しょうぐんさまのへやにいくからきたたからがねむる・・・』

「將軍様の部屋に異国から来た宝が眠る!!」

百合と夢津美は仰天した。

「い・・・異国から来た宝——!？」

「こうしちゃあいられない!」

百合と夢津美はすぐさま綾尉の部屋へと向かった。

『スパアアアン!!!!』

百合はもののすごい勢いで綾尉の部屋の障子を開ける。

「な・・・なんだ・・・!？」

驚く綾尉を無視して百合と夢津美は部屋の中をあさりまくった。

「あった! 木箱よ!」

そして百合はその箱を手にとると、ゆっくりと開けた。  
だが・・・

「か、から!？」

ご丁寧にはからっぽ。

「なーにをやっているのだ百合たちは・・・」  
そして、百合と夢津美はじめて綾尉がもっている物体に気がついた。

「な、なにそれ・・・？」  
つやつやでプルプルした黄色いモノ。

そして上には茶色い液体がかかっている。こんなもの、見たことない。

「これか？なんでも佐門に聞いたところ、ぷりんという異国のものだそうだ。

その箱に入っていた。」

「え・・・ええええええええっ！？」

「せっかく判じ物を解いたのに――！！！」

百合と夢津美はそう言うと、綾尉に向かってタツクルをする。

「ぐえっ・・・ちょ、まった・・・」

綾尉は二人の育ち盛りの女に押しつぶされながらもがく。  
ん？さてよ・・・じゃああの判じ物を作ったのはもしかして・・・  
百合は遠くを見つめると、何か分かったように微笑む。

今年の正月は、楽しくすごせそうだ。



## 松重の戦い 一 (前書き)

最近、夢津美とお千をよくまちがえます。  
だって、似てるし・・・



## 松重の戦い 一

正月気分もぬけたある日のこと  
百合はめずらしく中庭で武道にはげんでいる。  
霜が降りた中庭はやけに静かだった。

弓を持つ百合。

「うんぐっ・・・ぐぐぐ・・・」

だが、弓が引けていない・・・。

「ダメですよ！ 百合様！」

百合に仕える女中、夢津美はパンッと手を鳴らした。

「そんなこと言ったって・・・弓が引けないんだもん！！」

「いざという時に武道は必要なですよ！」

いつもはやさしい夢津美だが、武道のこととなると態度が一変するのだ。

恐るべき二重人格である。

「しょうがないな・・・」

百合はしぶしぶ弓を引く。

「うううう！！ あともう少し！これで手を放せば・・・」  
と、その刹那――

「一大事じゃあ！！」

「わああっ！！」

きゆうに百合の祖父、佐門が飛び込んできたのだ。

放った弓は大きいくから外れ、塀の上を飛びこえてどこかへ消えた。

「何しにきたのよ、もおっ！！」

不機嫌だ。

そんな百合にかまわず佐門は青い口を開く。

「百合、よく聞け。おまえの実家がある松重<sup>まつがさね</sup>地方で戦がおこった！」

「……え？」

百合は、しばらく佐門の言ったことが理解できなかった。

「そ……それどういこと!？」

百合は我が耳を疑った。ウソでしょ？

「おまえの実家近くで大きな戦がおこったのじゃ! どうやら下級武士と領主軍との対決らしい。」

「なっ……」

百合の手から弓がすべり落ちる。

『カランと』音を立てて地面に落下。

——百合は、戦という言葉がこの世で一番きらいだった。

百合の母は、百合がまだ四つの時、戦によって命を落とした。

「じ……じゃあ父上は!？ お千は!？ 撒は!？」

佐門につかみかかる。

「お……おちつけ、百合……」

「どうなるのよおおお!!!」

「……っ!」

佐門が、そっぽを向く。

「まだ、何とも言えんのじゃ……」

「そ、そんな!」

百合は弱々しく壁にもたれると、目をキッと見開いた。

「私、実家へ戻るわ!!」

「えっ……!」

夢津美が手を口にあてる。

「いかん、百合!!」

「だって……父上や撒たちが危険な目にあってるのかもしれないの

に・・・」

それに、撒の家は武士だ。いつ戦に巻き込まれてもおかしくない。

「ねえ、おねがい！ 行かせてよおおお！！！！」

絶叫する百合。

夢津美と佐門はその様子をだまって見つめた。

「しょうがない・・・」

佐門が口をひらく。

「命令だ、百合！ただちに松重へ参れ！！」

「！！」

百合はがばっと顔を上げる。

「行くがよい、百合。自分の運命は、自分で決めるのじゃ。」

「は、はい！！」

佐門に敬語を使うなんて何年ぶりだろう。

「で、でもそれは危険・・・」

「護衛をつける。問題ない。」

佐門は夢津美にぴしゃりと言いはなった。

そして百合に向かって笑顔をつくる。

「参れ、百合。」

☆

籠にゆられながら百合は啞然とした。

以前、撒と小さいころよく遊んだ野原は戦地と化してしてる。

あるのはそこらじゅうに倒れている人と馬。

また、よく買い物に行かされていた市場は木の残骸が落ちているだけだなにもない。

「な・・・！」

そしてしばらくしたころ――

「百合！」

聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「父上！」

籠から降り、辺りを見渡す。

二人の人物が駆け寄ってくる。

「百合――！！」

「父上！ お千！」

なつかしい顔だ。

「戻ってきたのか！」

父上は笑みを浮かべる。

それからしばらく、百合は父上とあれこれ話した。  
城のこと、綾尉、夢津美、蒼たちのこと。

すると突然、

「とまれえ――！！」

という大声が響いた。

前を見ると、たくさんの人。

みんな槍やら弓などの武器を持って。

「あれはいつたい・・・？」

百合の問いかけにお千が耳打ちする。

「あれは、今から戦場へ行くものです・・・」

よく見ると、みんな痩せてる。ろくに食べ物をしていないの  
だろう・・・

そう思って、百合は我が目を疑った。

その人々の中にいる、一きわ小さく、一きわ痩せた少年。  
それは――。

「撒・・・！？」



## 松重の戦い 二

百合は信じられなかった。

小さいころからずっと一緒に遊んできた撒。

その撒が、戦場に行くなんて・・・

「撒！」

百合はガリガリに痩せている撒に声をかけた。

「ね・・・姉さん・・・？」

撒は弱々しく百合を見上げて呟く。

以前まではやる気に満ちあふれていた瞳は、その輝きを失っている。

「撒、どうして！？ どうして戦場なんかに行くのよ！？」

百合は撒の肩をつかみながらわめく。

撒は顔をふせる。

「僕には、どうすることもできないんだよ・・・」

「・・・」

突然おとずれる静寂。森の木々がサアツと音を立てた。

「もう、姉さんには関係のないことなんだ。ほっといてくれ・・・」

ふいに、撒が百合の手を払いのける。

「そ、そんな・・・」

「集まれえ——！！」

馬に乗った男の大声が響くと、撒は百合に見向きもせず立ち去る。

「撒・・・なんで・・・」

残された百合は絶望的だった。

撒があんな態度をとるなんて。

戦争という者が、人の心をこんなに変えてしまうということがショックだった。

その場にしゃがみこむ。

「百合様、何をしていますのです、着物が汚れますよ！」  
すかさずお千の聲がとぶ。  
着物なんて、汚れたっていい。

「撒・・・」

溢れてくる涙。

「百合様!？」

お千が駆け寄ってきた。

慌てて涙をぬぐう。

「これから戦地に向かうもののそばにいては危険です。」  
お千・・・もう、何も、何もわかってない。

だったら・・・だったらいつそ・・・

「お千!」

あまりの大声にお千が体を震わせる。

「な、なんです? 百合様・・・」

百合はキッと目をつり上げた。それは、決意を意味する。

「私も戦場にいくわ!」

「!?!」

一瞬、時が止まる。

「な、ならん! 百合!」

父上が飛び出す。

「どうしてよ!？」

「それだけはならんぞ!」

火花散る二人にお千はとまどう。

「いいか、百合。この世ではやっていいことといかんことがあるのだ。」

父上の迫力に押され、百合は黙り込んだ。

「とにかく家に入れ。」

百合は、しぶしぶ家の中に入った。

その夜。

父上とお千は、ぐっすりと眠っている。部屋の机には、和紙があった。

その和紙に書かれているのは、達筆な百合の字。

『撒に、会いにいきます。』

暗闇の山道を、一人の影が横切る。

時刻は、九ツ半。（午前一時）

夜なので、人の気配はまったくくない。森は唸り声を上げていた。

「いたっ！」

百合は、石に足をとられて倒れこんだ。

そして、また起き上がる。

息が、とぎれとぎれになってくる。

それでも、百合は走り続けた。ある場所を頼りに。

そして、走り始めてしばらくたったところ。

遠くにぼんやりとした灯りが見えた。

大勢の人々が円になって座っているようだ。



その真ん中には炎。

進んでいるうちに目が慣れてきた。大将らしき人が、地図のような物を指さしている。

その中心に、百合はつつこんだ。

「まって!!」

たくさんさんの視線が百合に集まる。

ムリもない。戦の作戦中、少女が割り込んで来るなど前代未聞だ。

「な、なんだあお前は!？」

地図を広げていた大男は立ち上がった。

「私も戦地につれて行って!」

百合の言葉に、その場にいる人々は息をのんだ。

しばらくして、大男は馬鹿にしたような笑みをうかべた。

「へっ。悪いがよ、ここは女が来る場所じゃあねえんだよ!」

百合を思いっきり突き飛ばす。

「——っ!」

だが、百合はひるまなかった。

大男の肩をつかむ。

「お願い!」

「へっ・・・何度頼んでも同じ・・・」

大男の言葉が停止した。

百合はものすごい力で大男の肩をつかんでいる。

これも撒と遊んでいて身についた怪力だ。

「お・・・願ひ・・・!」

百合の爪が大男の肩にくいこむ。

「————痛!」

大男は、百合を振り払う。

「勝手にしろ。」

百合の前に置かれる弓。

「!」

「へまはすんじゃねえぞ。」

「は・・・はい!」

大男は、後ろを振り返った。

「皆の者いざ、出陣じゃあ!!」

人々は慌てて道具を背負うと歩きだした。戦地をただひたすらに目指して。

夜が明ける。

百合たちの軍は、山々に囲まれた戦場に到着していた。

そして、その軍の前方にはもう片方の敵の軍。

地を揺るがすような、陣太鼓の音が響き渡る。

「ゆけえ!!」

戦の幕開けだ。

百合は瞳をゆっくり閉じると、覚悟を決めた。



## 松重の戦い 二（後書き）

浅葱 ついに十話！ 百合は城にはいないので  
様にインタビューです！

綾尉

綾尉様、なにか一言！

綾尉 あん？ うっせえハゲ！

浅葱 ・ ・ ・ ・ ・ 。

## 松重の戦い 三(前書き)

いよいよ戦も終盤です。

百合はどうなるのか・・・

### 松重の戦い 三

「ゆけえ！」

高らかな陣太鼓の音とともに、両方の陣がいつせいに交わる。一人が弓を引く。

すると一人、また一人と人が倒れていく。

そんな中、百合は一頭の馬に乗り、必死に弓を握っていた。

「えいっ!!」

予測不可能な百合の矢は、たくさんの敵を射抜く。

もうだれが味方だか敵だか、百合には分かっていない。ある意味超危険人物である。

百合はただ、目の前に襲い掛かってくるやつらに向けて必死に矢を射るばかりだった。

「ぐっ！」

近くで叫び声上がる。

百合は真っ先に反応した。

「撒！」

かつて幼なじみだった撒が、数人の敵に囲まれてるようだ。

「撒に触るんじゃねえ!!!!」

百合は必殺技(????)で敵を蹴散らす。もう何が何だかわからない……

「ね、姉さん……」

撒は申し訳なさそうに百合を見上げた。

「まったく、撒はちっとも変わってないんだから……ホラ、こっち！」

百合に手をひかれて走る撒は、微かにほほ笑んだ。

「姉さんらしいや!」

「撒・・・!」

なーんていい感じになっていたのも、ほんの数秒。  
目の前は、敵だらけだ。

「見てなさい、撒!」

そう言うのと、再び弓を握る。

撒はそれを見たときたんあわてて止める。

「ダメだよ! 姉さんコントロール最悪なんだから、どこ飛んでくかわかんないよ!」

ん? なんか今、さらりと失礼なこと言われたような・・・

そう言ってる間にも、一人の敵が百合に槍をかまえて突進して来る。

「まかせなさいよう!」

百合は撒を馬に乗せながら勢いよく弓を引いた。

『ビュン!』

矢はへんな所にぶっとんでいったが、一秒後。 また、ユーターンして帰ってきたのだ。

「ぐわあっ!」

ふいをつかれ、敵は背中に矢が刺さった。

「すごい! 超ハイパスペクトラルトラノーコンの姉さんが、敵を射るなんて・・・!」

その口、聞けないようにしてあげましようか? 子供でも容赦しませんよ。

「ヒィィ冗談冗談!」

そうやって、しばらく敵を倒しつづけている時だった。

「!?!」

十人、二十人ともあろう敵が百合と撒をとり囲んだ。

「くっ・・・!」

さすがの百合も、これにはあせる。

「悪いが、あんたらはここで終りなんだよ！」

一人がいやらしい笑みをこぼした。

「二十対二なんて卑怯だぞ!？」

「うるせえ、ガキが！」

スラリと、刀を抜く。

「撒!!！」

その時、

「ぐわああっ！」

刀を持っていた敵が崩れ落ちた。

「な、なんだ!？」

大勢の敵の目線の先には――

「綾尉!!！」

現在百合の夫である綾尉が馬にまたがり、刀を握っている。

「大事ないか!？百合!」

「なっ、なんで綾尉がここに――!？」

百合は飛び上がった。

「佐門に聞いた。」

がくっ。 フツ―すぎる。

「とにかく、ここは私にまかせて百合は家に帰れ！」

「ええええっ、今さら――!？」

「ここは危険なのだ！」

「だって、撒も！」

「撒は心配ない！」

「で、でも・・・」

綾尉は百合の肩をつかむ。

「私は、百合を危険な目にあわせたくないのだ。」

綾尉の迫力におされた百合は、

「はい・・・」

と言って踵を返した。

「姉さん！」



だが、撒の声に思わず振り返る。

「僕、姉さんの分も頑張るよ！」

いつもの無邪気な笑顔。

百合は微笑んだ。

「・・・ありがとう。」

百合はその言葉を最後にし、戦地を去ったのである。

☆

それから四時間後、百合たちの軍はみごとに勝利を収めた。  
不利な状況に在りながらも、見事だったそう。

そしてついに明け方、遠くから列をなして軍が戻って来た。

「綾尉っ！」

そして、百合はこの数時間、家の前で綾尉や撒の帰りを待ち続けたのだ。

遠くから馬に乗った綾尉に向かって駆け出す。

「百合、無事だったか。」

百合はうんうんとうなずいた。

「で、撒は？喜んでた？」

こういう時なら真っ先に、姉さーん！とかいって来そうなんだけど・

『撒』という言葉聞いた綾尉は、とっさに顔をふせる。

しばらくの間ののち、百合に向かってゆっくりと顔を上げた。

「百合・・・よく聞け・・・」

「？」

「撒は・・・死んだ・・・。」

その瞬間、百合の体中の血が凍りついた。

「え・・・？」

「もう、この世にはいない。」

綾尉が後ろを振り返る。

そこにあるものは――変わり果てた撒の亡骸。

仰向けに馬に乗っかっている。

「一人で軍につっこんでいて・・・頑張りすぎた。」

「うそ」

「百合・・・」

「うそっ!!!」

百合はふるえる手つきで撒を地面に下ろす。

「撒・・・？」

撒は、かたく目を閉じたまま。その目はもう、開かない。

「ねえ、返事をしてよ・・・撒・・・」

返事など、ない。

脳裏を過ぎるのは、あの時の言葉。

『僕、姉さんの分もがんばるよ!』

あれは、ほんの数時間前の出来事。

いつも人のため、世のためにがんばっていた撒。

「撒・・・」

「百合」

「撒――――――っ!!!!!!」

百合は感情をぶちまけ、絶叫した。

「いやああああああああっ!!!!!!」

綾尉はその姿を、だまって見つめるしかなかった。

次の日の朝。

百合は花束を持って、坂道を歩いていた。

「ふう・・・」

額の汗をぬぐい、花束をおいたその場所は、かつて撒と星を見たあの丘。

ただこの前とちがう所、丘の真ん中に一つの小さな石が置いてある。百合はその場にしゃがみ、花をゆっくりとそえた。

撒が好きだった堇の花。

「撒・・・」

ポツリと呟く。

「ごめんね・・・撒・・・本当に・・・ごめん・・・」

大粒の涙が石の上にこぼれる。

「私、撒のこと・・・守れなかった。撒は・・・がんばるって言うて・・・くれたのに・・・」

激しくしゃくり上げる。

「こんどは逆に・・・わたしが撒のために・・・いい女ひとになるから・・・」

涙をぬぐった。

「百合——！ そろそろ帰るぞ——！」

ふいに、綾尉が遠くから叫ぶ。

「は——い！」

綾尉のもとに向かう百合。その顔は、いつもとは変わらぬ笑顔だった。

だが、その途中、足を止めて丘をもう一度振り返る。

百合は、青く澄んだ空を見上げた。

ざあっと、一陣の風が吹き、花が揺れる。

声が、聞こえた——。

懐かしい、もう二度と聞けない撒の声。

『ありがとう――』

百合は微笑んだ。

一目散に綾尉のいる場所に向かって駆ける。

その頭上には、かつてないほどの鮮やかな空が広がっていた。

## 綾尉の兄搜索大作戦

風が、少女の頬をなでる。

竹箒を握りしめ、中庭を掃いていた少女はその手を止めた。

「一月中旬にしては妙に温かい風だったわね・・・」

少女、百合は天を仰ぐ。

と、そこに一人、飛んで来た者がいた。

「ゆゆゆゆゆ百合様、なにやっでんですううう!!」

百合の女中、夢津美だ。

「なにつて・・・中庭の掃除だけど・・・？」

夢津美の問いかけに、百合はきよとした顔で答えた。

「そんなことは女中の私がやるからいいんですよ!？」

「だって・・・ヒマなんですもん。」

そう。城に来てから、百合はやることがなくてヒマだった。

以前なら、父上におつかいを頼まれたりと色々やる事があったのだが。

「とにかく、百合様はこちらに・・・」

「あ、ちよつ、私の竹箒取らないでー!」

二人でごちゃごちゃとやっている、頭上から声が降って来る。

「百合?」

「ハッ、綾尉!？」

次期將軍の綾尉は、百合の夫である。

「そんなにヒマなら、頼みごとがあるのだが・・・」

「何?」

百合は、先をうながす。

「実はな、今日は私の兄上にあたる綾伽りょうかが久しぶりにこの城へ帰ってくるらしいのだ。」

「まあ、綾伽様が。いったいどのようなご用件で?」

気がつく、隣には夢津美がいる。

「うむ。なにやら嫁を迎えたそうなの……それで一緒に城へ来るらしい。」

「へえ」

百合と夢津美は同時に言った。

「だが、一つ困った事があったな……」

綾尉は額を抑える。

「兄上はもんのすんごおおおおおおい方向オンチなのだああ!!!!」

「……は？」

百合と夢津美、二人の目が点になった。

「幼いころからそうだった！ 右といえば左に行く！！ 東と言ったら南の方向を向く！！」

あげくのはてに自分の家でも迷っていた!!」

「……」

あ、雀が鳴いているなあ……（ド無視）

「兄上の家から城までの距離といったら恐ろしい！絶対たどりつけぬ!!」

「で、でも、護衛をつけるんじゃないんですか？」

夢津美がおずおずと口をはさんだ。

「分かってないな……兄上の恐ろしさを……」

綾尉、そんなに顔を近づけないで……

「兄上はなあ、一秒でも目をはなすと視界から消えるのだ!!」

「そ、そんなに――!？」

「そこでだ、百合。」

綾尉がわざとらしい咳ばらいをする。

「なんとか兄上を城にたどりつけるようにしてくれ。」

「で、でもその綾伽様の家って遠いんでしょう？」

「ここから一里（四キロ）ほど先にある。」

近っ！ 綾伽様の家、近っ!!

「兄上にとっては遠いのだ。」

「お、おそろしい・・・」

ふいに、綾尉が百合の手首をつかむ。

「百合、お願いだ。兄上を見つけ、城まで一緒に来てくれ。」

その眼差しは、真剣そのもの。

百合は、ハアツとため息をついた。

「分かったわよ。」

そう言って、百合は綾伽を迎えに行くハメとなった。綾伽搜索大作戦スタートだ。

だが、考えてみたらあそこで断っておけばよかったと、百合は後から後悔することになる。





## 綾尉の兄搜索大作戦（後書き）

新キャラ登場です。

ただでさえキャラをよく間違えているので大変なことになります。  
綾尉と綾伽、名前がソックリなので・・・。

## 銀色の雨は心を濡らす

百合はすっかり小さくなった遠くの城を見つめ、呟いた。

「それにしても、どこまででかいのかしらね、この城は・・・」

さっきから百合は綾尉の兄の綾伽をさがすために、ひさびさに城内からぬけ出した。

だがかなりの時間歩いているのだが、いっこうに城の敷地内から出れないのだ。

それはよっぽどこの城が大きいことを物語らせる。

「ふう、休憩っと。」

百合は近くの石に腰をおろし、汗を拭った。

風が心地よい。

「ふー空は青いわねえー この分だとまず、雨は降らないでしょ・・・」

百合が空を見上げながら言った時だった。

はるかかなたから薄暗い雲が近づいてきたかと思うと、あつという間に空が黒い雲でおおいつくされる。

「こ、これは・・・」

百合の肩にしずくが落ちた。

『ポツ、ポツ』

空から雨粒が多数、降ってくる。

『ドザァー——————！！』

またたく間に雨は、土砂降りになった・・・。

「・・・・・・・・・・」

百合はしばらく自分の運のなさに落ち込んでいたが、すぐに立ち直る。

「こうしちゃられない！ どこか雨宿りできるところ——！」

手を頭の上にのせるといふ半分ムダな行為をしながらも、百合は小

走りに急いだ。

と、しばらくするとなにやら前方に小屋が見えてくる。

「これは、馬小屋・・・？」

崩れかけてボロボロだが、形だけはしっかりしている。

「なんかアヤシイわね・・・まあいいか・・・」

おそるおそる馬小屋の扉を開け、中に入った。

『キィィ』

「おじゃまします・・・」

中は、一面が藁、藁、藁！

百合は自分が馬になった気分がし、情けなくなってくる。

と、いか馬小屋に姫君がいること自体がミスマッチなのだ。  
だが百合はとりあえず、腰をおろした。

辺りは雨粒が葉にあたっては落ちていく音だけが響いている。

百合はフゥゥとため息をつく。

「それにしても、綾伽様はどこにいいのかね・・・」

「ここだよ。」

「!？」

ふいに、声のした方に視線をやる。

すると藁の中からもっそりと人が！

さすがの百合も、これには下肝をぬいた。

「うっぎゃああああああああああああっ!!!!」

「お、おちつけ・・・」

「どっぎゃああああああああああああっ!!!!」

百合は藁をつかみ、絶叫した。（変体）

「おちついてくださいまし!」

凜とした声で百合は我に返る。

振り返ったら、一人の女子おなこと、男の人。

二人とも、服装がいやに立派だ。

その瞬間、百合はピンときた。

「もしかして、綾伽様!？」

男は偉そうに胸を張った。

「いかにも、私は綾尉だ。」

まじまじと見ると、イケメン。さすが綾尉様の兄上!

そしてその隣の女子は?

「あっ、もしかして綾伽様のすてきな奥様!？」

百合はあえて『すてきな』を入れる。

「気づくのがおそいよね。私は綾伽の奥方、娑<sup>さ</sup>菫<sup>え</sup>。」

娑菫はそう言くと、フンと鼻をならした。

意志の強いその目は、百合とどこことなく似た雰囲気を漂わせている。

「いやゝそれにしても降ってきたねゝ」

空気が読めていない綾伽は、ポリポリと頭をかいた。

「この分だと、しばらくやまないことよ。」

娑菫が腕をくむ。

「ハッそういえば・・・」

ふいに綾伽が百合を指さした。

「そなたはだれだ? そのみすばらしい外見からすると・・・農民か？」

「・・・・・・・・」

その時、百合は無事に城に帰れるかどうか心配になってきた。(無理もない)

だが、この直後に誰もが予想しない出来事がおこる。

## 雨上がりは時に危険が潜む（前書き）

いつまで何をチンタラ百合達はやっているんでしょうか。  
書いてる作者さえ腹が立ちます・・・

## 雨上がりは時に危険が潜む

「それにしてもおそいのお・・・百合は・・・」

綾尉はすっかり雨がやんだ、青々とした空を見つめて呟いた。

その細くて色白の指先には一つ、二つ、三つ、あふれんばかりのまんじゅうが、しっかりと握られている。

「あの、綾尉様、まずはまんじゅうをおいていただけませんか・・・？」

すかさず綾尉に仕えている蒼が皿を差し出す。

「・・・皿がよくれる。」

「・・・」

蒼は皿を差し出した格好のまま、硬直した。

「ほれ」

「うひゃあ！」

その硬直した膝を、何者かがつん、とつつく。

「何するんですかあ、佐門様！ 今どきの年寄りが、膝かっくんなんてやるのが暗すぎです！」

「だれが年寄りだと！？」

「あ、ハイ、すみません・・・」

だって、おまえ年寄りじゃん。という気持ちを必死におさえ、蒼は頭を下げた。

「で？ 何用でこちらに参った、佐門。」

綾尉がまんじゅうの粉がついた指先をなめる。

「あ、実はですのお・・・なにやら連続して人を殺めて、奉行所に引っ立てられたものが逃げ出し、この城付近をさまよっているらしいのじゃ。」

「ああ、最近さわがれている殺傷事件の下手人か。<sup>はんにん</sup>」  
それがどうしたというように綾尉は青空を見つめる。

「で、百合が今、綾伽様をむかえにいつておるじやろう、もし遭遇でもしたりしたら・・・」

「まさかあ、そんな運の悪いこと、おこりませんって。」  
蒼が笑う。

「それもそうじゃの。」

そう言って、男三人は笑った。平和だなあ！

だが、三人とも百合が超不運の持ち主だということを知らず、つと後になってからだった。



雨がやんだ。

森に木漏れ日が降りそそぐ。

「どうやら、雨は上がったようね。」

百合は額に手をかざしながら空を見た。

「じゃあ早く出発しましょう。こんなところ、いつまでもいたくありませんわ。」

隣で仁王立ちしているのは、綾伽の妻、娑荏。

その娑荏をなだめるように、綾伽はニコリと微笑む。

「まあまあ、そうあせらず。この城の庭は広いから、ゆっくり行こう。」

「はい。綾伽様。」

でも綾伽の言うとおり、本当にこの庭は広い。見ると、はるか遠くに城が・・・

百合、ただいまのテンション2パーセント。  
とりあえず、綾伽達とともに歩を進める。

しばらく歩いていると、急に視界が開けた。

見渡すような高原、ゆれる若葉、所々咲いている四季折々の花たち。  
風が、吹いた。

百合の髪がなびく。

「す、すご・・・」

本当にここ、城の庭っスカ？  
城すげえなく財力あるな

「綾伽様たち、見て・・・」

百合は後ろを振り返った。

だが、そこには綾伽たちの姿はなく、花が風になびくばかり。

「・・・・・・・・え？」

百合は、綾尉の言葉を思い出す。

『兄上はなあ、一秒でも目をはなすと視界から消えるのだ!!』

ザァ（血の気が抜ける音）

「し、しまったああああ!!!!」

綾伽様ああ!と、花をおしのける。

「ど、どこいっちゃったんだろ、ホントに・・・」

「綾伽様、これはもしや城の門では？」

娑荏は、目の前の鉄の扉を指差す。

「ん？ そうだな。思ったよりも早く着いたな」

綾伽は、扉を開ける。

だが、その顔は曇っていた。

「あの、どうかなさったんですか？」

「い、いや、何か足りないなくって」

「足りない？」

「や、気のせいかな。荷物はあるし」



「そうですよ。」

綾伽は笑う。

ボタン、と綾伽ご一行が中に入ると、城の扉が閉まった。

「まったくこよ、綾伽様！」

息を切らす百合。

もうしばらくの間走っているが、人の気配はない。

「城に帰ったら、少しとちめてやらなきゃ・・・」

すると、ふいに背後から物音がした。

綾伽様！？と、思い振り返る。

だがそこには・・・

「え・・・？」

やせこけた、一人の男が髪を振り乱して立っていた。

浪人？だろうか。身に着けているすべてのものがボロい。

「あ、あのおく？あなたも迷子ですか？」

百合はおそろおそろ声をかけてみた。

すると、相手は予想外の行動に出た。

『チャキ』

ん？なに今のニブイ音・・・

そしてその直後、なにかをこすり合わせるような音が、辺りを包む。

ま、まさかこれって・・・

一瞬、男に日がさした。

その懐には、キラリと光る・・・

「かたなあああああ！？」

やっぱりじゃあさっきのは刀を抜く音・・・

と、百合が勝手に納得している間に、男はどんどん接近してくる。

「ちよ、まった、ザ、ストップ!!」

ぶっちゃけピンチなんじゃないかな? この状況。  
えええい! とにかく逃げるっ!!

百合は猛ダッシュで走りだす。

だが、男は百合の後を巧みに追ってきていた。

(これは由々しき事態だな・・・)

そう察した百合は、近くの木に飛び乗る。葉がヒラリと舞った。

「ヘッ、ざまあみなさい! 昔、寺子屋の先生から逃げまくっていた  
私には、

木に飛び乗るぐらいチョロイのよ!」

まったく自慢になっていない言葉を吐き捨てながら下を見下ろす。  
見るとあの男はもういない。

「フン、どんなもんですか!」

そこまで言いかけて百合はハッとした。

なんか、後ろからミョウな気配が。

あわてて振り向くと、目の前が紅色にそまった。

同時に、焼けるような痛み。

「痛っ――!」

男の刀が百合の頬をかすったのだ。

ヤバイ! 早く逃げなきゃ!!

そう思ったが、百合は忘れていた。

ここは、木の上。

百合の上半身が傾く。

『!?!!』

百合は、目を硬く閉じた。

(誰か――!)

☆

「まったく、やることが過激なんだよ、百合は。」

「だって、迎えに行けって言ったの、綾尉じゃん！」

百合は、綾尉のまんじゅうを奪い取った。

頬には、赤い傷。

「それにしても、百合を探して庭に出たら、いきなり木の上から降ってきたんだぞ！」

綾尉はしかめっ面でまんじゅうをほおぼる。

「まあまあ、いいじゃないですか。百合様も無事に戻ってこられたし。」

夢津美が綾尉をなだめた。まるで子供のケンカに割って入った気分だ。

「まあ・・・な。おかげで噂の、殺傷事件の下手人も捕まったことだし。」

「でしょ！？大目に見なさいよ！！！」

そこへ、障子を開けて入って来たのは、綾伽と娑苳。

「こら、綾尉、そこらで終わりにしておけ。」

「あ、兄上！」

娑苳も微笑む。

「そうですよ。もうすぐ桜の季節になりますから、ケンカはよして花見にでもいきましようよ。」

「う、うむ・・・」

それを聞いた百合の目が輝く。

「お花見！？私、食べ物は三色団子がいいわ！！」

「まったく、食べ物のことしか考えてないヤツだな。」

呆れ顔をする綾尉。

城の中に笑い声が響く。

外では、桜の蕾が出番を待っているかのように開きかけていた。



**雨上がりは時に危険が潜む（後書き）**

やっと一段落つきました。（ホッ）

## 伊豆の空と夜風と海（前書き）

14話と15話の間がものすごく空いてしまいました。  
すみません、すみません・・・（謝り中）

## 伊豆の空と夜風と海

弥生———。

「は？温泉旅行！？」

綾尉は目を白黒させて叫んだ。

その綾尉の視線の先には、百合の祖父にあたる老中・佐門の姿。

「そうじゃ。綾尉様は時期將軍候補にあたるお方。

たまには、のんびりとお休みになられたらいかがかと・・・」

「で、でも、百合が・・・」

綾尉の言葉を待っていたかのように、佐門の顔がデレッとにやける。

「だ、か、ら、百合も誘っていくんじゃよ。それとお付きの女中も数人・・・」

綾尉は佐門の頭の中が手に取るように分かった。

（まったく年がいのないじいさんだ・・・）

「そうですよ、綾尉様。最近なにかと苦勞がたえないご様子なので・・・」

その時、部屋の障子が開き、綾尉に仕える蒼が入ってくる。

「う、うむ・・・」

もう一押し。

「それにじゃ、綾尉様！」

佐門の顔がアップに。これはかなりイヤだ。

「この温泉旅行は、百合との関係を深める数少ないチャンスなのですぞ！」

「はい？」

「私も早く跡継ぎの顔が見たいのじゃ！」

綾尉の頬がわずかに赤面する。

「そ、そんなこと言っても・・・なあ蒼！」

「ハイ。わたくしもぜひ綾尉様のお子様を早く見てみたいものです。

「・・・・・・・・・・。」

敗者、綾尉。

まったく・・・こいつらには勝てん・・・

☆

伊豆。

「海〜!!」

百合は宿から見える景色に向かって、感嘆の声を上げた。

「百合様、あまり身を乗り出すと浜辺に落ちますよ。」

その百合の隣で、女中の夢津美が苦笑しつつ答える。

でも、たしかにいい景色だ。銀色に光る砂浜、浅葱色の海、白い雲。

百合たちが泊まっている旅籠は、まさに絶景の景色が丸見えだ。

「そういえば、百合様は海を見るのは初めてでしたっけ？」

「うん。城に行く途中に海は通ったけど、寝てたから見てないの。」

はずんだ声で答える百合。

ふと、夢津美は手を顎にあてた。

「それにしても、なんで綾尉様は突然こんな旅行に・・・」

「さあ？息抜きじゃない？それより、下田といえぱやっぱり温泉でしょ！」

百合はそう言うと、桶や手ぬぐいをつかんで部屋の障子を開ける。

「フフ、やっぱり百合様はああいう元気な姿が一番ね・・・」

百合と夢津美は露天風呂につかる。

「あったかい〜！」

「ホント、いい湯ですね〜」

聞こえるのは波の音と、風呂の水滴が落ちるチャポンという音のみ



だ。

「空は青いですね♪」

「うん♪」

二人は早くものぼせてきている。

その時、百合の視界を何かが横切った。

「え・・・」

「どうしたんです？百合様。」

「い、今、人の形をしたものが横切ったような・・・」

「人の形？」

その時、そばに生えている茂みから何かが飛び出す。

「ハッロォ♪」

「・・・・・・」

百合と夢津美は何が起こっているのかわからなかった。

・・・・そこには、佐門が立っていた。

次の瞬間、

「うっぎゃああああああああああああ！！！！」

百合は、そこらに散らばっているおけやたらいを力任せに佐門に向かって投げつけた。

「痛・・・いたたた・・・百合、ストップ・・・」

「何がストップよおおお！！この変体エロじじい！！」

スコーン、と佐門の脳天に百合のたらいが決まる。その場に崩れ落ちる佐門。

「百合様、いいんですか・・・？佐門様が・・・」

「いいのよ夢津美！こんな変体じじいは湯船にしずんでればいいんだから！」

百合はそう言うと、佐門の後頭部をひつつかんで湯船の奥深くに沈めた。

「夢津美、もうわたしは温泉出るわ！」

百合が去って言った後、夢津美は佐門に向かって静かに両手を合わ

せたのだった。  
「・・・ご愁傷様です。」

☆

夢津美は温泉を出た後、しばらく一人で夜の下田を散歩していた。  
海の塩の匂いが夜風によって運ばれてくる。

「こうして月を見ながら夜風にひたるのも悪くないですね」  
空には無数の星がきらめき、ときおり夢津美のそばを立派な籠が横切る。

（それにしても、さっきからわたしの横を通っている籠はこの籠  
ですかね？）

夢津美はいやに立派だった籠を思い出して腕くみをした。

（海の方へ行ったけれど、何かあるんでしょうか？）

夢津美はつられるように海へと向かう。

（何だかあそこの砂浜に立っている小屋に入っていくけど・・・）

行灯を照らして夢津美は中を覗き込む。けして立派とはいえない小屋だ。

『!?!』

そこには夢津美の予想のつかなかった光景が広がっていた。

中には、三人の武士らしき人がいる。だが、服装がいやに立派だ。  
お奉行様かなにかか？

そしてもう一人、背の高い金髪の男、目が藍色だ。どうやら異人らしい。

でも、何かが変だ。

異人が武士にキラキラ光る球体を差し出す。どうやらギヤマンと呼ばれるものらしいが。

武士が異人に金をわたした。それも、小判が二、三、四・・・

夢津美は頭の中をすばやく整理する。

人気のない小屋の中・・・異人さん・・・立派な武士たち・・・交換された金とギヤマン・・・

えーと、これってぶっちゃけ密貿易ですか・・・？

そう感じたたん、背後で『スラリ』というめちゃくちやばい音がした。

「！！」

体の中が熱い・・・そしてすさまじい痛み。

夢津美の意識はそこで途切れた。

最後に聞いたのは、刀をさやにおさめる『カチャリ』という音だけ・・・

## 波にのまれる悲痛な叫び

色とりどりの料理が並び、あたりをいい香りがつつむ。

「夕食、ごちそうね!!」

百合は箸を持ちながら歓声をあげた。

「ゆっくり食べるがいいぞ。のどに詰まらせたら大変だ。」

綾尉は苦笑しながら百合を眺めた。

ふと、百合は鯛のさしみを食べながら辺りをふりかえる。

「どうした、百合。」

声をかけたのは百合の祖父の佐門。

「そうえば・・・夢津美知らない？みないんだけど・・・」

しばしの沈黙。

「蒼、知らぬか？」

「綾尉様が知らないのに私が知るわけないじゃないですか。」

綾尉の側近の蒼は苦い顔でつぶやいた

「外に散歩にでも出たんじゃないのか？」

「ううん・・・夢津美は夕食までにはいつも必ずもどってきてるもの・・・」

綾尉の言葉に百合は目をふせた。

「・・・じっとしてるのも何だし、探しにいきましたか？」

蒼が立ち上がった時。

『ヒュン!!!!』

「わあっ!？」

百合は三メートル先までふっとんだ。

「何だ今のは!!」

「矢です、綾尉様!」

蒼が畳にささった矢をぬく。どうやら、先に紙がくくりつけられているようだ。

「それにしても、何で矢が？まさか夢津美がもどつてこないのに関係があるんじゃない？」

百合の言葉にうながされるように、蒼は矢についている紙をひろげた。

『そなたたちの仲間はあずかった。帰してほしくば、百両もつて海にくるべし。』





「ええええええええ——！！！！まさかの拉致られちゃった系」

「百合、下田にて『え』を八回と……」

「エロじじい、メモるな！」

「いいじゃあ〜んわしが昔からつけている『百合成長日記』に加えるのじゃ〜♪」

「いつのまにそんなものを……っていうより今は夢津美が先でしょ！」

百合は綾尉をふりかえった。

「綾尉！　いますぐ百両を……つていってもそんな大金あるわけないか……」

「は？なにを言っているのだ。そんな金額などたやすいぞ。」

綾尉の懷からバラバラと小判がちらばる。

「あああんと、  
 どんだけポケットマネー持ってるの!? うわあ・  
 重っ!」

「百両では重すぎます。なので、最初の一、二両は本物であとは偽モノにしましょう。」

蒼の言葉に反対するものはだれもいなかった。

☆

「いいんですか？」

「何がだ。」

「この女の始末ですよ。われわれの密貿易がバレたのに・・・」  
男はフン、と鼻をならして、倒れた夢津美を視線だけで見た。

「この女は敵をおびきよせるエサにすぎん。殺すのは後だ。」  
もう一人が首をかしげる。

「と、おっしゃいますと？」

「ここには、時期將軍候補が旅行に來ているというウワサだ。そしてこの女の立派な服装・・・」

「もしかして、この女はその將軍候補の仲間とでも？」

男は夢津美に顔を近づけた。

「ああ、その確率が高い。きっと女中かなにかだろう。」  
ニンマリ笑う。

「でも、なぜ百両よこせと？」

「金で貿易をもっと発展させるためだ。その後に事故死にみせかけ、皆殺しにする。」

「さすがはお代官様ですね♪」

ふいに、男は小屋にかかった西洋式の時計に目をやる。

「・・・いくぞ。」

「えっ・・・どこにですか？」

「そろそろ哀れな將軍候補の到着する時間だ。」

男は、そう言って冷たい笑みをうかべた。

「ここが海ねっ・・・！」

「おまえは危ないからくるなといっただろう、百合！」

「そんなこといったって・・・私だって夢津美が心配だもん！」

百合は金がいった箱をつんだ綾尉にたてつく。そのバックには、沈む夕日に鮮やかな伊豆の海。

「それにしてもこの砂浜！歩きづらいわね」

「シッ！」

急に蒼が、ひとさし指を唇にあてる。小声で百合に耳打ちした。

「だれか向こうからやってきます。」

いわれて視線をうつすとたしかに人影が数人見える。

綾尉は箱をおろし、数メートル離れると大声で叫んだ。

「金はおいていく！夢津美を帰せ！」

人影がちかづく。だが、夕方のうえ逆行なので顔はよく見えないが。

「・・・たしかにうけとった。」

低い、冷たい声だった。

「だが・・・」

その瞬間、男は何かを手にした。キラリと光るあれは・・・刀！！

「おまえらには死んでもらう！」

「くっ・・・！」

突進してくる男たちにためらうように、綾尉たちも刀をぬく。

「百合様は、あそこのしげみにかくれて！」

蒼に言われるまま、百合はしげみに体ごとつつこむ。

『キーン！』

刀と刀がぶつかりあう金属音を合図に、乱闘が始まった。  
時々、金属音にまじり男たちの叫び声が轟いたが、それも長くはつづかず再び辺りに静寂がもどる。

「百合、もう出てきてよいぞ。今蒼が夢津美を助けに行った。」  
綾尉に言われ、おそろおそろでみるとたくさんの男が浜にちらばっていた。

「これで、あとは夢津美をまつだけね・・・」  
その瞬間、まだ意識のあった男が立ち上がり、百合めがけてとっしんする。

「百合、危ない!!!」  
『ザシュッ!!!』

ポタポタと血がたれた。しかし、その血は百合のものではなく――  
「おじいちゃん!!!」

百合をかばって刺された佐門が、体を折って倒れる。

「グッ・・・!」

「佐門殿!!!」

「おじいちゃん!」

百合は夢中で佐門を抱きしめた。

「おじいちゃん!」

「佐門殿!」

「ウッ・・・百・・・合・・・」

「いやああああ!!! おじいちゃん!!!」

「佐門!!!」

「死んじゃだめ!!! 死なないでええええ!!!」

「・・・あゝつかれた♪」

佐門はむくりとおき上がる。

「・・・は?」

「佐門殿・・・刺されたのでは?」



佐門は頭をかいた。

「んゝでも、あんまり深い傷でもないし・・・」

「じゃあどうしてこんな演技を・・・」

百合の問いかけに佐門がにやける。

「いいじゃゝん♪いっぺん百合に抱かれてみたかったもゝん♪」

百合と綾尉の中で、何かが切れた。

「こ・・・この変体エロジイイイイイイイイ！！！！！！」

佐門は二人のパンチをくらって、再びくずれおちた。

「百合様！あら？佐門様はどうなさって・・・？」

帰ってきた夢津美は佐門を不思議そうに見る。

「夢津美！」

伊豆に、百合たちの笑い声が戻った。

## 願いが天へと消えた日

季節は卯月。城にも、春が訪れようとしている。

「あゝヒマねえ・・・」

そんなお花見ムードがただよう中、百合は一日中ゴロゴロしていた。と、遠くの方から足音がし、障子が開く。

「百合様っ！」

叫んだのは、百合の女中の夢津美。

「ふえ？なあにいく？夢津美。」

「なあにいくじゃないですっ！春になってからゴロゴロしまくりじゃないですかっ！体がなまりますよ！」

百合は困ったように顔をしかめる。

「で、でもお・・・一ヶ月前、伊豆に行ったし・・・」

「前すぎですっ！ちよっとは動いてください！もうっ・・・」

そういうなり、夢津美は百合が寝ている布団をはぎとった。畳に転がる百合。

「いったあ・・・いきなり布団をはがなくてもいいじゃない・・・」

「つべこべ言わずにさっさとおきる！」

普段はやさしい夢津美だが、怒ると怖い。

百合はしぶしぶ立ち上がり布団をたたんだ。

無言で布団をたたみ終わると、障子に人影が写る。

「あら、誰かしら・・・」

夢津美がカラリと障子を開けた。

「失礼します。」

「蒼！」

障子の向こうに立っていたのは、綾尉の側近の蒼だった。

「百合様、綾尉様が来てほしいとのことですよ。」

「綾尉が？何の用？」

「それが・・・急にお父様の具合が悪くなったということ・・・」  
「え！？」

綾尉の父というと、この国を支配する將軍様で、百合を城に招いた本人でもある。

「まあ大変ね。すぐ行かなきゃ！」

さっきまでのダラダラ、ゴロゴロぶりが嘘のように百合は着物のたるみを直しはじめた。

長い廊下を夢津美と蒼の三人で歩き、綾尉の部屋へ到着。

蒼が障子を開いて、百合は中に入った。

「百合」

時期將軍候補の綾尉が振り向く。

百合はその場に正座した。

「將軍様の具合が悪いんですって？」

「ああ・・・今、医者に来てもらったが何とも・・・」

綾尉の顔が曇る。

「・・・じきに兄上が来ると思う。もし、このまま逝ってしまう場合もあるだろうと・・・」

綾尉の兄とは、同じ將軍候補の一人の綾伽のことである。

「ジメジメしても仕方ないわよ。將軍様の所へ行きましょう。」

百合の提案に、綾尉は「ああ・・・」とつぶやいた。

將軍様には、百合は実際には会ったことがなかった。綾尉のもとへ来たときより、もっと長い廊下を渡る。

やがて、小さな部屋についた。

数人の警備の許可を得ると障子を開ける。

「・・・父上」

のれんをくぐると布団が敷いてあり、そのそばに二人の人物が正座していた。

一人は綾尉の兄の綾伽。もう一人は医者。百合も、同じように正座した。

布団で寝ている將軍様は顔に輝きがない。歳は、佐門と同じぐらいだろうか。

「・・・う」

將軍様が、弱弱しくつぶやいた。

「綾・・・尉・・・綾・・・伽・・・」

名を呼ばれた二人は將軍様にかけよった。

「父上！」

「・・・今まで・・・すまなかった・・・な・・・」

「何を言ってるのです父上！」

綾伽が叫んだ。

「・・・百・・・合・・・殿」

急に名前を呼ばれ、ハツとする百合。

「綾・・・尉・・・を・・・よろしく・・・たのみ・・・ますぞ・・・」

その言葉を最後に將軍様はゆっくりと瞼を閉じた。

医者が首を横にふる。

「そ・・・んな・・・父上——っ！！」

綾尉の瞳には、うっすらと涙。

「三回目・・・か・・・」

そんな中、百合はボソリとつぶやいた。

これで三回目だ。人との別れを経験したのは。

戦に行つて死んだ撒。そして母。

放心状態になっていた百合は、綾伽の言葉で目を覚ました。

「遺言は？」

「え・・・？」

「父上の遺言の中身はと言ったのだ。」

「兄上！父上が亡くなったばかりだというのに・・・」

綾尉の言葉を見殺して医者から遺言状を受け取る綾伽。

『後をたのんだぞ。次の將軍はそなたたちの意思で決めるべし』

遺言を呼んだ綾伽の顔がこわばった。綾伽のこんな顔、見たことない。

「兄上・・・遺言にはなんと・・・？」

「うるさい！次の將軍は私だ！」

百合はビクッと体をふるわせた。そして、綾伽は障子を開け出ていってしまった。

「兄上・・・？」

百合はこの時やな予感がした。

將軍様の死、次の將軍になれるのは一人のみ。しかし、綾尉と綾伽の二人の將軍候補。

この出来事が後に二人の人生を揺るがす事件に発展するとは、この時だれも思っていなかった。

嵐が、やって来る――――――。

## 願いが天へと消えた日（後書き）

何だか、意味深に終わってしまいました。  
できるだけ間を空けないように投稿したいです。  
できるだけ・・・で  
すが。

## 天は黒く染まる

「も、申しあげます！」

将軍様が亡くなって八日後。

青い顔をした家臣の一人が綾尉の部屋の障子を開け、正座した。

「どうした。」

「大変でございます！綾伽様が、家臣を集め戦をはじめそうな勢いのこと！」

「なにっ!？」

その場にいた佐門、蒼、綾尉の三人は氷ついた。

「やはりそう来たか・・・」

綾尉が腕をくむ。

「話し合いによる解決はできそうか？」

「と、とんでもない！今にも出発しそうな勢いでございます！」

「そうになると、やはり戦しかないか・・・」

綾尉がつぶやいたとき、

「ちよつとまったあああ！」

どこから聞いていたのか、いきなり百合が現れた。

三人は、今度は別の意味で氷つく。

「百合・・・？」

「綾尉！戦だけはぜったいダメ!!」

百合はやたらと綾尉に接近する。

「で、でもそれしか・・・」

「うるさああい！とにかく戦はダメなの！」

子供みたいにダダをこねる百合に綾尉は困り果てた。

「静まらんか！」

佐門の声に、辺りが波うったかのように静かになる。

「百合！ワガママを言うのもいい加減にしろ！」

怒られた百合は反撃に出る。

「なによ！戦になったたら大勢の人が困るってことがわかんないの！  
？このハゲジジイ！」

「なにいいい！？」

二人はゼイゼイと荒い息をはいた。

「私は、戦で大切な人を失うところをもう見たくないの！」

「だ、だが・・・」

「もういいわよ！私一人で綾伽様を説得に行く！」

そう言うなり、百合は障子を開けて外に飛び出した。

「い・・・いかん！百合——っ！！！」

☆

百合はそばにつないであった馬に飛び乗ると、一里ほど先の綾伽の屋敷をめざす。

だが、少しずつあやしくなっていく雲行きを見て、百合はさらに馬を急がせる。

（戦なんてぜったいさせないんだから！！）

そして以外とすぐに屋敷へ到着。

そばの木に馬をつなぎ、屋敷の中へ入る。幸い今は作戦中なのかだれもない。

しのび足で廊下を歩いていると、向こうから物音が聞こえた。

（だ、だれ！？）

「そこでコソコソしているのはだれです！姿をみせなさい！」  
りんとした声とともに現れたのは、綾伽の妻の沙絵。

「わ、私です！百合です！」

知っている人が現れ、ホッとする百合。

ところが沙絵は百合を冷たい眼差しで睨みつけた。

「去りなさい。」



「・・・え？」

「去りなさいと言っているのが聞こえないのですか!!」  
百合はそのきつさに驚いた。小雨が辺りに降り始める。

「り・・・綾伽様にあわせてください!」

「たとえば百合様でも今は敵どおし。分かっただらばやく去りなさい!  
人を呼びますよ。」

「イヤです!」

百合は沙絵をつかんだ。

「さわるな!」

『パン!!』

頬をたたかれる。百合は庭に突き飛ばされた。

「次このようなことがあったら、私はあなたを殺しますよ。」  
そう言い残し、沙絵は奥へ消えた。

「・・・。」

百合は一人で雨にうたれ、しゃがみこんでいた。

「な・・・んで・・・」

大粒の涙がこぼれ、雨と混ざりながら頬をつたる。

「いやあああつ!!」

百合の叫びは、雨音にかき消され、誰にも届くことはなかった。

## 檜皮の乱 一

なぜ、人々は繰り返すのか。

沢山の人が嘆き

沢山の人が泣き

沢山の人が死に

沢山の人が傷つく。

戦で富を得る物は誰もいない。

それを分かっているがらどうして・・・

頭の底で声がした。

「・・・百合・・・」

ゆっくりと瞼を開く。

「百合っ！」

視線いっぱい綾尉の心配そうな顔がひろがった。

「・・・私・・・」

頭を抑えながら起き上がる。

「兄上の屋敷内で倒れていた。まったく、運ぶのに苦労したぞ。」

百合は頭を抑えていた手ははずすと、ゆっくりとそれを見つめる。

「ねえ・・・綾尉・・・」

「ん？」

「何で、人間は繰り返すのかしら・・・」

綾尉は、予想しなかった質問に少し驚いた。

「・・・と、いうと？」

「・・・戦よ。誰も、何も富を得ることはない。それなのに、何でかなあって。」

「・・・。。。」

「・・・。。。」

降り続く、雨音が聞こえる。

「・・・答えられぬ。だが・・・運命<sup>さだめ</sup>とでも言えはいいのか。」

綾尉は静かに立ち上がった。同時に障子が開く。

「失礼します。」

蒼が、正座した。

「ただ今、綾伽殿の軍が出発なされたという知らせが。至急、準備を。」

「・・・ああ、今行く。」

少しためらいがちに呟いた。

「ああ、そうだ百合。」

障子に手をかけたとき、綾尉は視線を百合にむける。

「・・・なに？」

綾尉は、かすかな微笑をうかべた。

「このゴタゴタが片付いたら、皆で花見をしよう。」

百合は少し驚く。だが、すぐに微笑んだ。

「ええ。楽しみにしているわ。」

かすかに百合に微笑みをかえした綾尉は、障子を閉める。

誰もいなくなった部屋で、百合は密かに声をあげて笑った。

「皆で花見か・・・綾尉らしいわね・・・」

この言葉こそが、綾尉にできる精一杯の口説き方だということも知らずに。

☆

広く長い渡り廊下。そこをゆっくりと歩く青年、蒼。

空を見るとパツとしない灰色をしており、相変わらず雨粒は降り注いでいた。

屋根からつたってきた水滴が蒼の髪を濡らす。

それを忌々しげに見つめると、ゆっくりと長い睫毛を伏せた。

「今の状況は？」

その言葉の三拍後に、庭園の方から雨に混じり低い声が響く。

「・・・現在、綾伽様は三百万人ほどの兵をつれ、城の近くまで接近中。」

蒼はわずかに眉間にしわをよせた。

「三百万？ 意外と少ないな。」

「少数ですが、どれも武術をかねそろえたつわもの。」

下手な農民などより、よっぽど腕がたちます。」

蒼は、降り注ぐ雨粒を見つめる。

わずかに口元を緩めた。

「それなら・・・まあよい。」

そして、ゆっくりと歩き出す。

「そなたも戦にそなえ準備をしておけ。甲賀忍者、准嗣じゅんしよ。」

准嗣と呼ばれた男は、軽い返事をすると思を飛び越え、遙かかなたへと消えた。

拳を握り締めた蒼は雨粒に向かって呟く。

「すべては、我が主、綾伽様のために――――。」

蒼が過ぎ去ると、物陰に隠れていた佐門は、密かに舌打ちをしたのだった。

## 檜皮の乱 一（後書き）

な、なんかえらく暗くなってしまいました。

（これってたしかジャンルコメディーでしたよね！？）

でも、この乱が終わったら、もう少し明るくなる予定なので・・・  
しばしお付き合い願います。

次回、ついに乱の幕開け！さらに蒼にも異変が！？お楽しみに！！  
と、勝手に盛り上がるアホな作者。ヒュルル・・・

## 檜皮の乱 二

日が、遠い山のかなたに沈もうとしていた。

周りをオレンジ色に染めながら、ゆっくりと。

綾伽は、立ち上がると遠くに見える城を見つめた。

その瞳は憎悪にみちている。

「綾伽様。」

綾伽は振りかえらなかった。声の主は大体予想がつく。

「准嗣・・・どうだ。敵陣の様子は。」

もう、綾尉は兄弟ではない。自分にはむかうただの敵陣にすぎなかった。

「はい。現在、城は混乱におちいり、準備がととのっていません。攻め込むなら今しかないと思われます。」

綾伽は、小さくため息をこぼした。

「・・・変わったな。」

「・・・と、おっしゃいますと?」

准嗣が首をかしげるのが見えたような気がした。

「私だ。綾尉のことは、本当に好きだったのに、今は——憎い。」

夕日が、さらに輝いた気がした。

「・・・なんて、今さら言ってもしょうがない事だな。」

「・・・。」

彼は、今夕日をどんな気持ちで見つめているのだろうか。  
准嗣はなにも言わず、無言でその背中に視線を向けた。

☆

「・・・まさか、この檜皮ひはだの地で争いが起こるとはな。」

昔、この地に降り立った一人の僧侶がいた。

その僧侶は身分にかかわらず、さまざまな人々に学問を教え、親しまれてきた。

だが、ある日別の僧侶が、彼に嫉妬し無実の罪で処刑した。

その時の僧侶を染めた血が、檜皮色に見えたことから

この地は『檜皮』と呼ばれるようになったのだ。

そんな昔話を思いだしながら、綾尉は顔を上げた。

「一度起こってしまったことは変えられません。」

蒼は綾尉に鎧兜を差し出す。

綾尉は鎧兜と手に取ると、ゆっくりと身につける。

「・・・そろそろ、行くか。」

「はい。」

綾尉が立ち上がった時、佐門が障子を開いた。

「綾尉殿、出陣でございます。」

カチャカチャと、鎧兜を鳴らしながら綾尉は部屋を出る。  
そして、蒼もそれに続こうとした時。

「おい、蒼、おぬし・・・」

佐門が蒼を呼び止めた。

「・・・何か？」

苦虫を噛み潰した顔で蒼が振り返る。

「あ、いや、な、何でもないわい！」

不審そうな視線を佐門にむけ、彼は部屋を出た。

「ねー夢津美、これマジ重いんですけどぉー」

百合は着慣れない鎧兜をいや々な目で見ながらそう言った。

「百合様っ！言葉使いがなってません！」

夢津美は赤いハチマキ(?)を頭に巻いている。気合マンマンだ。

「いいですか。これから大変な大騒ぎが起こるのです！」

すぐに逃げられるようにこんな格好をしているのですからね!!」  
ピシヤリと言われシュンとなる百合。

「じ、じゃあ、なんで乱が起こってから逃げるのよ。

今すぐに逃げればいいじゃない・・・」

「今逃げれば、綾伽様の軍に捕らえられて即刻てうちですっ！」

乱が起こった混乱に混じれて逃げるしかないんですよ!？」

「あ・・・う・・・ごめん・・・」

百合は思わず謝った。辺りは女中が動き回る音で騒がしい。

(本当に、乱が始まってしまうのね・・・)

百合はこの時、胸をしめつけられるような刹那さを初めて感じた。

かがり火が勢いよく燃える。その周りには弓を持った男達が並ぶ。

「準備は整った。あとは・・・」

綾伽はすぐ近くまで接近した城を睨み上げた。

「あいつは、どう動くか――」。――」



踵を返すと、息をたっぷり吸う。

「みなの方、ぞんぶんに暴れるが良い！火をつけるのだ！！」  
大勢の人々の団結の音が響く。

「見せてやろうぞ、この綾伽の力を——」

炎のついた弓が城に向かって一斉に放たれた。

## 檜皮の乱 二（後書き）

な、なんかえらく前置きが長くなってしまいました。

えーと今回は二十話目なので、記念（？）にキャラにインタビューをしようと思います。

作者「百合、今の感想は？」

百合「私、今回出番少なっ！何とかしてよ！！」

綾尉「なあ、そういえばこの乱って何で起こったんだっけ？（普通にスルー）」

綾伽「・・・父様が死んだのが原因だろ。遺言残さずに逝っちゃって・・・」

亡き將軍サマ「ワシのせいにするでない！こんの親不孝者めっ！！」

全員「えーでも、本当のコトだし・・・（小声で）」

### 檜皮の乱 三（前書き）

フ、フウゝ何とか書けました。

次の話でようやく乱は終わる予定です。  
あと少しお付き合い願います・・・

### 檜皮の乱 三

百合と夢津美が戦闘態勢に入ってから数時間後——。

辺りを走っていた女中の動きが慌しくなってきた。

「・・・これは、何かあったわね・・・」

百合は動き回る女中たちを険しい目つきで追いながらつぶやく。

すると、案の定女中の一人が泣きそうな顔をして飛び込んできた。

「ゆ、百合様！た、大変でございます！！」

「どうしたの、一体・・・」

百合は青い顔の女中をせかした。

「そ、それが、二の丸に火があっ！！」

「なんですってえ！？」

通常の城の内郭というのは、『本丸』『二の丸』『三の丸』『西の丸』『北の丸』『吹上』

の六つから成っている。

『本丸』は政務や儀式を行う場所。そして、『二の丸』というのは將軍の側室などが

隠居生活を送っている場所である。

ちなみに、百合たちが今いるのは大御所や將軍の世継の居住空間などが存在する『西の丸』にあたる。

「え、ええっ、でも何で火が！？」

「それが、綾伽様の軍が炎のついた弓を射たご様子で・・・！」

「中の人は無事なの！？」

「は、ハイ！全員避難したようで・・・」

百合はそれを聞いてホッと胸をなでおろした。

しかし、おちついてはいられない。次期にここにも火が来るだろう。

「百合様！逃げてくだい！！」

夢津美もそれを察したようである。

「う、うんっ」

「私があっても百合様を守りますっ！」

「残念だけど、それはないよ。」

ふいにサラリと聞きなれた美しい声が響く。

驚いて振り向いた先には、蒼の姿があった。

「蒼っ！！何でココに？綾尉の所にいるんじゃ・・・」

「そんなことより、今は逃げるのが先です。さあ、私の後に。」

「で、でも夢津美が・・・」

「ああ。」

彼女なら心配ないよ。と蒼が後ろを指さす。

視線を向けるとそこには『一水入魂』と達筆な字で書かれたハチマキをした

夢津美がいた。

二の丸に向かって「ファイヤー！」と叫んでダッシュする。

どうやら消火活動をする気らしい・・・

「す、スゴいわね・・・逆に火いあおりそう・・・」

「さあ、百合様はやく。」

首をコクンとふると、蒼の後につづく。

渡り廊下に出て、外を見渡すともうすっかり日はかたむいていた。

そして何よりもいくつもの火が上がっている。綾伽軍がつけた火に違いない。

ため息を一つつくと、百合はハッとした。

（よ、よく考えたら今蒼と二人つきり・・・）

それは、非常に気まずい。

ここに佐門一人でもいれば、会話が和むのに・・・

百合は生まれて初めて、佐門の存在のありがたみを感じた。

何か会話をしなくては・・・

そこで、百合は記憶をたどり、ずっと気になっていた『あること』を思い切って聞くことにした。

「ね、ねえ蒼・・・」

「何ですか」

「一つ聞いてもいい？」

「どうぞ。」

百合は拳を握りしめる。

「初めて私に会ったときのこと、覚えてる？」

「・・・。」

蒼は無言だ。

「たしか、城<sup>こ</sup>に来る途中の道で、崖から落ちた私を助けてくれたのよね。」

蒼はじっとさぐるような目で百合を見つめている。

「で、あの後もう一回城で再開したとき、私は蒼にこう聞いた。

『あの・・・私のことおぼえています！？』って。」

百合の唇がわずかに震えた。

「でも、蒼は私の問いかけに『？へんなこというんじゃない、百合様に会ったのは初めてです。』って答えたわ。」

「・・・それが、何か？」

ギシギシと歩くたびに廊下の木の音が響く。

「その、知らないっていった理由を今、話してくれない？」

蒼が目を見開いた。同時に、歩みを止める。

「・・・初めて百合様に会ったときの私は、私ではなかったのです。」

「????」

百合の眉間にしわがよった。

「あの時、私は綾尉様ではなく別の人に仕えていました。」

名前を『禮叉<sup>れいさ</sup>』と変えて。」

蒼が睫毛を伏せる。

「正確にいうと、私の本当の名前は『蒼』ではなく、『禮叉』です。」

「え・・・じゃあ何で名前を変えて・・・？」

蒼の目が開かれた。

「それは私が、綾尉様をさぐる隠密だからということ隠すため。」  
「・・・え？」

「まだ分からないのですか？」

風が吹いた。蒼——いや、禮叉の髪がなびく。

「私の主は綾尉様ではない！綾伽様、ただ一人だ！！」

百合は状況を理解できなかった。

なぜ、彼はこんな恐ろしい目で睨んでいるのか。

いや、それよりも。

コノヒトハ、ダレ——？

「今まで、お付き合いありがとうございます。少し無礼をお許してください。」

蒼が指をパチンと鳴らす。同時に、誰かが闇から現れた。

「あ・・・」

百合は、青い顔をおさえて二、三步後ずさる。

「人質をやっと手にいれました。これで、勝利は我らの手に。綾伽様。」

何？今何がおこってるの・・・

## 檜皮の乱 四

燃え盛る城。次々と上がる火の手。

早く逃げなくては・・・でも、体が動かない。

「何？一体何がおこってるの・・・」

百合は頭の中で絶叫した言葉を呟いた。

なぜ、これまで膝をついてくれていた人が敵の綾伽といえるのか。なぜ、私をこんな恐ろしい瞳で睨んでいるのか。

——わからない。

それに、二人の後ろで膝をついている黒い男は誰・・・

「この人かい？この人は甲賀忍者の一人、准嗣。私の同志さ。」

百合の質問に答えるかのように、『蒼だった人』はそう言って微笑む。

ちがう、今までの蒼じゃない。今まで隣で笑っていた蒼は——

怖い

燃える炎の中に混じれて、鳥が一鳴きした。

「さあ。」

百合は差し伸べられた綾伽の細い手にビクッと肩を震わせる。

「な・・・に・・・」

「いっただろ、百合様。あなたは我々の人質。綾尉をおびき出すためのね。」

綾伽は、そう言って微笑を浮かべた。

「大切な人を失いたくなかったら——来い。」



「い・・いや・・」

「来いっ!!」

百合のすぐそばで火が上がる。

「まったく往生際の悪い姫だ。」

准嗣がスラリと刀をぬいた。

「そなたの大切な人間<sup>やつら</sup>、皆殺しにされたいか？」

「――っ!!」

突然、体を准嗣におさえこまれた。

「は・・はなして!!」

『ザシュッ!!』

百合が叫んだのと同時に、なにかが空をきった。

「くっ・・!?! 何奴だ!!」

小刀が床に突き刺さった。准嗣の頬から血が垂れる。

「百合を放せ!!」

炎の中から、刀を手にして現れたのは。

「綾尉っ!!」

アンタ来るのおそすぎよ!と、百合は綾尉にかけよった。

「フン、やっと来たか。我が弟よ。」

綾伽も刀を抜く。

綾尉は少しもためらわず、視線を禮叉に向けた。

「おまえ・・裏切ったな!」

「変なことを言わないでください。私は元から『こっち側』です。」

綾尉はため息をつく。同時に罵声が響いた。

「綾尉よ!ここで決着をつけようではないか。私がお前を倒せば、百合殿をもらい、私の女中にする。」

「ああ。のぞむところよ、兄上。」

刀をかまえる綾尉。あいかわらず百合は准嗣におさえこまれている。禮叉はというと、だまってその様子を見つめている。

二人の間に、火花が散ったのが見えた気がした。

「行くぞ、綾尉――！」

綾伽が突進する。しかし、綾尉は器用にそれをかわした。

『キーン――！』

さびれた金属音に負けず、綾尉は叫んだ。

「私は、本当は兄上と戦いたくありません！」

「今さらなにを言う――！！！」

綾伽の一撃。危機一髪でかわすと、少し後ずさる。

（強い）

でも、負けるわけにはいかない。自分には、大切な人がいる――

綾尉は、みごとな刀さばきで綾伽の髪二、三本を切断。

「くっ・・ちょこまかとおお！」

綾伽は振りかぶった。

「目障りだあ！」

「――！！」

着物のすそが裂けた。さらに綾伽の攻撃はつづく。

綾尉はそれを必死に受けるだけ。

（百合――）

綾尉は視線を向けた。だが、その隙を見逃さない綾伽。

「終わりだ！」

「！？」

マズイ――

『ザシュッ――！』

「が・・はっ――！！」

綾尉が腹を押さえた。紅色の血が手を染める。それを見た禮叉の表情が、変わった。

「綾尉――！！」

百合は目を見開いた。必死に動こうとするが、准嗣におさえこまれているため動けない。

「死ねェ――！！」

「くっ・・・！」

（もはや、これまでか——）

綾尉がかたく目をとじた瞬間、

『キーン！』

一つの刀が綾尉をかばった。

視線を向けたその先には——

「禮叉！？」

彼は険しい目つきで綾伽を睨みつける。

「！おまええ・・・どういうつもりだ！」

「すみません綾尉様。私はバカでした。綾尉様は、あれだけたくさんのものをくださった。それなのに、私は——」

禮叉は、目を閉じる。

「もう、これ以上綾尉様をだますことはできません。」

綾尉は禮叉を見上げた。

「・・・おまえ・・・」

そして、綾伽がカツと目を見開く。

上半身を見ると、禮叉の刀が腹に刺さっていた。

「ま・・・さ・・・か」

ドサリと崩れ落ちる。

「兄上・・・」

綾尉が、一歩近づいた。綾伽は、それに気づくと目を閉じた。

「まさか、こんなことになるとはな・・・」

「・・・」

ごほっ、と血をはく。

「殺せ。」

「えっ・・・」

「殺してくれ、綾尉。おまえのその手で。」

小さな呟きだが、否を言わせない迫力。

綾尉は禮叉を振り向いた。コクンと彼はうなずく。

「あ・・・に・・・うえ・・・」

初めて見る、綾尉の涙。

「お許しを・・・」

鈍い音とともに、刀は綾伽の腹をとらえる。辺りは、燃え盛る炎。

「私は・・・兄上が好きです・・・」

その言葉に答えることはなく、綾伽は微笑を浮かべるとゆっくりと目を閉じた。

この瞬間、檜皮の乱は終わったのである。

☆

数日後。

彼女は、一つの石にひざまづく。

花をそえると、手をあわせた。

短い期間だったが、亡き夫とすごした日々を思い出す。

彼女は、声を上げずに泣いた。

この世で、最も愛した人——あなたが恋しい。

「・・・綾・・・伽様・・・!!」

これから、新しい国が築かれようとしていた。

夫が目指していた平和な世界。それがようやく実現する。

空は、澄み切るほど青い。

「——あなたは」

シアワセでしたか・・・？

百合は、その様子を黙って遠くで見つめていた。

#### 檜皮の乱 四（後書き）

ただ今、書き上げてぬけがらのようになっています・・・  
とにかく、疲れました・・・（気力ゼロ）

## 桜吹雪に勇気を託して（前書き）

何だか、コメディなのかシリアスかよくわからなくなりました・・・  
あつ、そういえば今までの話をだいぶ編集しました。  
ところどころ変わっておりますが、そこは気にせず・・・

## 桜吹雪に勇気を託して

すべて、終わった。

百合は、城からは少し離れた屋敷の中で、ゆっくりと起き上がる。檜皮の乱で城の一部が燃えたため、この屋敷で迎えた八回目の朝。障子を開けて背伸びをし、朝日を見上げた。

「あの日から、八日か・・・」  
口に出してみた。

あの日、綾伽は命尽きた。燃え上がる炎の中で。百合は一部始終しか見ていなかったのも、綾伽の最後は知らないが。

でも、不思議と涙は出なかった。母上や撒とは違って。

將軍は文句なしに綾尉に決まった。

でも、なぜか心が晴れない。

この気持ちは一体、何？

「百合様。」

ふいに、後ろから声がする。

「蒼・・・」

声の主の名前を呟くと、百合は振り返った。

いつも通りの蒼の顔だ。

あの日、綾尉に再び忠誠を誓った蒼は、『禮叉』という自分を消滅させた。

これから彼は、『蒼』として第二の人生を歩むのだ。  
ちなみに、蒼の同志だった准嗣は忍者をやめ、転職して寿司職人となった。

（その思考回路はわけわからんが・・・）

だが、変わったのはそのぐらいだ。百合自身も、周りの人々も何一つ変わっていない。

なのに、百合は自分が大きな変化を遂げたように思える。

『大人の階段のゝぼるゝ君はまだシンデレラさ』

（バックミュージック・思い出がいっぱい）

「おはよう。蒼。何の用事？」

百合は自分で笑顔を浮かべたつもりだった。

だが、蒼はその小さな動揺を見逃さない。でも、それはあえて口に出さなかった。

「・・・綾尉様がお呼びです。何でも、ものすごく急ぎの用事だそうで。」

百合はため息をつく。

「こんな朝っぱらから？何かしら。急ぎの用事って・・・」

しぶしぶ綾尉のいる離れに向かう。

部屋の前に着くと、障子を開けた。

「おお、百合！待っていたぞ。」

綾尉の顔がパァと明るくなる。

「で、何よ。急ぎの用事って。」

綾尉はニコニコしながら答えた。

「皆で花見に行こうぞ！」

「・・・・・・・・。」

すかさず百合のカウンターパンチが飛ぶ。綾尉はそれを器用によけた。

「あああああんたねえ・・・人を朝早く呼び出して花見はないですよ！！」

何が急ぎの用事よっ！

怒られてちぢこまる綾尉。蒼はその様子をだまって見守っている。

「でも、私は言ったぞ。檜皮の乱が起こる前に『皆で花見をしよう』



と。」

百合の目が点になった。そして微笑を浮かべる。

「しょうがないわねえ・・・じゃあ、夢津美達を呼んでくるわ。」

部屋を出て行く百合の背中を見つめながら、綾尉は蒼に話かけた。

「蒼も行こうぞ。この花見はもうすぐ行われる『將軍就任式』の祝いのためなのだ！」

その言葉を聞いて、少し真顔になる蒼だったが、すぐに微笑んだのだった。

「よし。これで大体のメンバーはそろったわね。」

百合はフンツと鼻息をはいた。

隣には寝起きの夢津美と、「花見じゃ〜」とくるった佐門。

そして寿司屋へと見事な転職を果たした准嗣だった。

ちなみに准嗣は掛け声さえかければ忍者時代のクセか知らないがどこにいても飛んで来る。

そんな多少不安がいっぱいなメンツで、桜の大木がある広大な庭へと出発した。

歩きながら、夢津美はこっそりと百合に囁く。

「それにしても・・・綾尉様、変わりましたよね。」

「へ、へッ？どこが？」

百合は抱えている弁当箱を落としそうになった。

「だって・・・以前はものすごかったんですもの。ホラ、百合様が城に来た当初・・・」

「あ、あああゝたしかに。私に向かって『へッ、いいこぶってんじやねえぞ！』とか言ってきて・・・」

夢津美は苦笑した。

「それが、今では・・・進んで花見などして。たぶん前の綾尉様だったら桜を見ても

『ヒラヒラ散ってんじゃねーぞこのバカ桜!』とか言っていたでしように。」

それはすごいわねー・・・と百合は呟く。言われた桜はたぶんもう咲くことはないだろう。

「これも百合様のおかげですよ。」

夢津美の言葉に顔が赤らむ。

「え。私、何にもしてないわよ!」

クスクスと夢津美が笑う。辺りに桜の花びらが舞った。どうやらもう着いたらしい。

「おーっ!桜じゃー!百合、弁当を開けるのじゃ!」

佐門の掛け声にワァーッと歓声が上がった。百合は包みを開いて桜を見上げる。

(・・・綺麗)

ヒラヒラと舞う桜の花びらに手を伸ばす。同時に、もう片方からも手が伸びてきた。

「え?」

ゆっくりと視線を向けたその先には――。

「わたくしも混ぜてもらって良いかしら?百合さん・・・」

「さ、沙絵さん!」

そこには、かつて綾伽の妻だった沙絵の姿があった。笑みを浮かべている。

「な・・・んでここに・・・」

「准嗣から聞いて・・・皆より前に来ておりました。」

桜の花びらをつかむ。そんな沙絵を見た百合は微笑んだ。

「沙絵さん、いっしょにお花見しましょうよ!!」

「・・・ええ。」

辺りは笑い声に包まれた。

皆が花見の最中、少し遠くの桜に腰を下ろした綾尉は、青い空を見上げた。

時々落ちてゆく花びらを目で追いながら。

「綾尉、なに一人でたそがれてんのよ。」

驚いて振り向くと百合がいた。その細い右手には二本の団子。

百合は綾尉の隣に腰を下ろした。団子を口に運ぶ。

「百合・・・私は、將軍になって本当によかったのだろうか・・・」  
ポツリと呟く綾尉に、百合は視線を向けた。

「何で、また・・・」

「私は、兄上の命と引き換えに將軍になるようなものだ。」

兄上に申し訳ないと・・・」

綾尉が目を伏せる。百合はその様子を見ながらため息をついた。

「何シケた顔してんの!」

ポン、と綾尉の頭を叩く。

「そんなのなおさら綾伽様に失礼でしょ。ちゃんと草葉の陰から見守ってくれてるのに。」

「・・・。」

「あなたはあなたの世界を作ればいいの。自由で、平和な世界を。そのために將軍になるんだから。」

「・・・百合」

百合の膝に花びらが落ちた。

「・・・私に、できるだろうか。」

綾尉が顔を上げる。

「ええ。あなたなら、きっと。」

百合は微笑んだ。団子の串を丁寧におく。

「一本、食べる?」

「うむ。」

綾尉は団子を受け取った。百合は桜の木にもたれかかる。  
ざあっ、と風が吹いて花びらが踊る。

將軍就任式は、三日後に迫っていた。

## 決意の瞳は心に届いて（前書き）

春・・・この季節がとうとうやって参りました。

現在の浅葱は花粉症による涙と鼻水でグチャグチャです。

そして目の前にはティッシュの山が・・・

春よ、早く過ぎ去っておくれ。

## 決意の瞳は心に届いて

その日、空はとても青く、澄んでいた。

ふわふわとした羊雲が城をかすめ、ゆっくりと進んで行く。

今日は、将軍就任式が行われる偉大な日だ。

辺りには、就任式に参加する各地の大名達が次々と城の門をくぐる。  
そんな時、我らが将軍様は・・・

「うっぎゃーー！」

城内に雄叫びがこだました。

百合はため息をつく、綾尉の部屋へと小走りで向かう。

「あんたうるさすぎよ！着替えくらい静かにできないわけっ!？」  
勢いよく障子を開けると、そこにはたくさんの帯と着物でぐるぐるまきにされた綾尉の姿が。

「で、でも百合っ！なんだこの重ね着の多さは！」  
必死にもがきまくり、帯がさらに絡まる。

「綾尉様、動かないでください。これで最後の腰帶です。」  
変わりに答えた蒼に叱られ、しぶしぶ静かになる。

今日の服装は普段とはだいぶ異なり、胸紐と腰帶、そして大紋で飾られた長袴を着用していた。

だが、この長袴は長い上、超動きづらいので綾尉はさっきから文句たらたらだ。

「しっかりしなさいよ。今日は歴史に残る大切な日なんだから。」  
百合までもに指摘された綾尉はさらにテンションが下がる。

蒼は最後の帯をきつく縛り終えた。

「ハイ、できましたよ。あとはこれを・・・百合様がのせてください。」

蒼から手渡された『風折り烏帽子』を受け取ると、クスリと笑う。  
百合はそれを沈んでいる綾尉の後頭部にチョコンとのせると、掛け  
緒をていねいに結ぶ。

「よしっ、完成！カンペキね。」

手をパンパンとはらい、綾尉を見上げる。

「あんた、そうしてると顔はかなりイケてるんだから、もっとしっ  
かりしなさいよ。」

百合の微笑に、綾尉は顔を上げた。

「う・・・そうか。なら今日は一日シャンとする事にする」

はりきって帯を結び直す綾尉を見てみると、ふいに障子が開く。

「百合様・・・忘れていませんよね？」

そこにはやたら笑顔を浮かべまくる夢津美がいた。

「へ・・・？」

百合は首をかしげる。忘れていること？

「百合様も着替えるんですよっ！」

夢津美はそう言うのと、どこからか櫛と口紅を取り出し、ニマァッと  
笑った。

同時に百合の血の気がサァッツと引く。

「う・・・うっぎゃああー！」

別室へと引きずられていく百合を見て、綾尉は吹き出した。

「なんだ・・・百合のヤツ、私と一緒にではないか。」

「同レベルと言うやつですね。」

蒼は聞こえないような小声で呟く。

その時、視界に佐門が映った。

「綾尉様、そろそろ大広間へ。」

その言葉に二人は真顔になると、ハッと顔を上げた。

「綾尉様の、おなゝりー!」

沢山の家臣達が頭を下げてゐる横を通り過ぎる。

大広間に足を踏み出すと、ゆっくり中央に置かれてゐる座布団に腰を下ろす。

右、左、後、ともに各地の大名達の姿。

そして綾尉の一番近い場所には、『カラスから白鳥へ』見事な変身を遂げた百合が笑顔で座っていた。

綾尉が腰を下ろしたすぐ直後、障子が開き今の太老にあたる人物が入場。

皆とは畳一段分高い場所に腰を下ろした。

余談だが、太老は老中とは違う。太老は老中（佐門）の補佐役に当たるのだ。

太老は佐門よりも年がいった男だ。口は髭で半分隠れている。

太老が咳払いをした。その場の空気が張り詰める。

「綾尉殿。」

「ハッ」

太老のしわがれた声に頭を下げ、勢いよく返事。

「突然だが、そなたはこの国をどう思われる。」

意味不明の質問に、大名達が騒ぎはじめ。

（何言っちゃってんの、あの老いぼれ?）

（大丈夫か? お年を召してらっしゃるから・・・）

（おいおい、台本と違うだろ）

台本があったのか・・・と思ひながらも、綾尉は聞き返した。

「・・・と、おっしゃいますと」

「そのままの意味じゃ。この国をどう思うかと。」

心の中で首をかしげながらも答える。

「正直・・・平和ではない。松重地方では戦があったりと・・・荒



れています。」

出身地の名前を口にされた百合がかすかに反応する。

大老はうんうんと頷くと、次の質問をした。

「では綾尉、そなたはこの国を平和にできるか？そなた一人の力で。」

綾尉は目を見開いた。心拍数が上がる中、百合と桜の下で交わした会話を思い出す。

「・・・一人では、出来ません。でも、佐・・・老中や家臣、多くの人々と力を一つにすれば―できます。」

大老は顔を上げた。そして、最後の質問。

「綾尉、そなたはこの国を平和にすると、誓えるか。」

綾尉の心に迷いはない。下げていた頭をクッと上げると、大老と瞳を合わせる。

「――誓います。」

大老はニツコリと微笑んだ。そして、佐門から何かを受け取る。

「これを、そなたに授けよう。民を導き、国をまとめる力となるだろう。」

差し出されたのは、刀。

これはただの刀ではなかった。その昔、兄弟どうしの乱が起こり、弟はみずからこの刀で兄の命をうばったのだ。たった一人の血縁だった兄を。

そして、その弟こそこの国の初代將軍。

以来、この刀は国の秘宝とされ、將軍が変わるたびに授けるようになった。

そして、綾尉も――

「たしかに受け取りました。」

丁寧に刀を両手で受け取る。その目は、決意で満ち溢れていた。

今、ここに新しい將軍が誕生しようとしている。

国を愛し、民を愛し、この世のすべてを愛する男。

大老は大声を張り上げる。皆が一斉に頭を下げた。

「これより、貴殿を第七代將軍としてここに任命する。」

## 花は荒地へと旅立ち

「もう、限界だ！」

一人の男はそう言うなり、机に拳を叩き込んだ。

男は四十代ぐらい。その周りには沢山の村人たち。

男のそばにいた老人がそれをたしなめる。

「ちよいとおちつくのじゃ。そんなことでは何も解決できん。」

優しく肩に置かれた手を男は振り払った。

「そんなこと言われても、これは村の危機です！長老。」

「だからって暴力ばかりでは皆が悲しむ。」

村の女達は二人のやり取りをハラハラしながら見守る。

「今こそ、団結の時だ！」

辺りの男の群れから、ワァーッと歓声が上がった。

老人はそれを悲しげな目で見つめる。

そんな老人をよそに、男はさらにまくし立てた。

「一揆だ！我々の道はこれしかない！！」

その叫びを合図に男達は立ち上がると、机に置いてある紙に自分の名を書き込んでいく。

そして名前で形どられた円に、最後の者の名が書きこまれると男は笑った。

「我々で、この梶子くちなしの地を守るのだ！！」

歓声の中、村の長老は一つのため息をこぼした。

☆

「將軍様、こちらの書類お願いします！」

早朝、勢いよく山ずみにされた書類に綾尉はげんなりとした。

今まできちんと整理していた書類は、新たに來た書類と混ざりグチャグチャになる。

「あゝ……」

綾尉は無造作に書類を積み上げると、その一つ一つに目を通す。この光景はもはや日常茶飯事となっていた。

將軍の手始めの仕事は、『各地域の問題点を知る』という者だ。月に一度、各地域の問題点が書かれた書類が送られてくる。

將軍はそれを見て、その地域に良いアドバイスを伝えなくてはならない。

だが――……

「アハハ蝶が飛んでるな」

徹夜をしてナチュラルハイになっている綾尉は、筆を手にとると書類に蝶の絵を書き込む。

「こらあ――！何やってんですか！」

蒼の手から放たれた硯が、綾尉の脳天を直撃する。

綾尉はそれをくらい、ハッと目が覚めた。

「す、スマン蒼……」

この光景も城の日常だ。

「ちゃんと仕事してください。あなたはもう將軍なんですからね。」  
蒼は厳しい視線を向けると、部屋を出て行く。

綾尉のげっそり度はさらに上がった。

「面倒くさい……」

そうして、次の書類を手にとると目を通す。ハッと綾尉は目を見開いた。

その書類は、松重地方のものであった。字を目で追いながらウンウンと頷く。

「ほう。百合の故郷もなかなか米や野菜の出荷額が多いのか、これで安心だな。」

なにが安心だかまったく分からないが、綾尉は上機嫌だ。

あっという真に松重地方は読み終え、新たな書類へ手を伸ばす。

しばらくダルそうに読んでいたが、次第に目つきが変わってくる。

「・・・この書類、妙だな。」

綾尉が言うのには理由があった。その地域では、地域の出金が六千両と異様に多い。

気になってその地域のほかの資料を見てみると、その地域は出金の理由がほとんどなさそうな小さな土地だった。とくに目立った出来事もない。

「横流し、ですね。」

びっくりして振り向くと蒼の姿が。

「へ・・・？それは一体・・・」

「この地域の出金、ほかの所と比べないと分かりませんがかなり異常です。」

そして、今の時期に一揆が集中している・・・」

資料を読みとりながらサラサラと答えていく蒼に少し関心した。

「これは、間違いなく上で何かがあります。」

「じ、じゃあすぐに家臣に探りを入れさせて・・・」

蒼はプルプルと首を横に振った。

「下手に家臣を入れさせると、策略がばれたと思われるので向こうは何をしだすか分かりません。」

「つまり慎重に行かせた方がいいということだな。」

蒼はまたしても首を振る。

「慎重すぎてもダメです。ここは一見幕府側に見えない身なりと性格をしていて、相手に不審に思われないようにし、なおかつ正確に内部の事情を探れる人間でなければ。」

「で、でもそんな都合のいい人間いるわけが・・・」

綾尉が言いかけたとき、障子が開いて寝起きの百合が入ってきた。

「おっはよく今日も頑張るわね」

二人の脳裏にあることがひらめく。

（ボサボサの髪、よれよれの着物・・・これならどう見ても將軍の正室とは誰も思わない！）

超失礼なことを考えると、二人はそろって百合に土下座した。

「百合、お願いがあるっ！」

「ははーん・・・つまり、その横流しが横行しているかもしれない地域の藩主の女中に私が成りすませと・・・」

「ま、一言でいうとそんな感じだ。」

百合は綾尉の向かいに腰を下ろした。

「私からもお願いです。国の平和がかかっているのです。」

蒼も隣に座る。

百合は額に手をあてた。そして数泊の沈黙。

「いいわよ。」

あっさりとした返事に二人は目を見開く。

「いい・・・のか？大体一ヶ月ぐらいだぞ。」

「かまわないわよ、綾尉。国の平和を維持するためにはこれぐらい当然でしょ。」

綾尉の顔がパアツと輝く。

「た、頼んだぞ百合っ！」

百合は微笑を浮かべる。

「藩主の屋敷に潜入して、不審な点や行動がないか調べるんですよ。任せなさい！」

「百合っ・・・」

「でも、綾尉達にしばらく会えないのは寂しいけどね。」

その瞬間、綾尉は百合をギュッと抱きしめた。突然の事態に蒼もポカンと口を開ける。

「ち・・・ちよっ・・・」

きつく抱きしめられた百合は身動きがとれない。

「百合、お前に言っておかなければならないことがある。」

「え・・・？」

綾尉は顔を上げた。

「お前は、本当に汚らしいな。」

その言葉に、百合のこめかみに青筋が浮かぶ。

「バツカやろお——！！！」

「ウゲフツ……！！！」

またしても百合のパンチをくらった綾尉は倒れこんだ。

（無理もない……）

蒼は心の中で思った。

「あ、そうそう。」

百合はクルリと死にかけの綾尉を振り返る。

「その地域……何ていう名前なの？」

綾尉は目をパチパチさせたが、すぐに返事を返した。

「梶子……だ。」

## 花は荒地へと旅立ち（後書き）

おわかりの人も多いと思いますが・・・姫君に出てくる地名は全部色の名前です。

檜皮、こげ茶色みないな色　梔子、黄色みないな色  
そして浅葱、水色に黄緑を混ぜた感じの色。

ただ、松重だけはどんな色か忘れてしまいました・・・（おい）



## 一陣の風は地に舞い降りる

障子を開ける気配がした。

辺りは白い煙が立ちこもっている。

その煙の出所は一人の男の口にあてられた西洋式のパイプから。

男は口に密着させていたパイプを放すと、フウッと深い息をこぼした。

「用件を早く言わんか。」

低い、男らしい声だ。視線を障子に向ける。その瞳は何の決意も感じさせない濁った瞳。

煙の中から現れた青年は男に向かって丁寧に正座した。

「申し上げます。」

ゆっくりと顔を上げる。

「この度、新しい女中がこの屋敷に入る予定です。」

「その女の詳細を教えろ。」

青年は懷から一枚のくしゃくしゃになった紙を広げた。

「年は十六。松重から来るそうで、名は百合。」

その言葉を聞いて、男の眉がわずかに上がる。

「松重・・・妙だな。この梔子の地は松重からずいぶん離れているはずだ。なぜ、わざわざ・・・」

男は何か考えるかのように額をおさえた。

「・・・その女中、目を放すでないぞ。」

「御意。」

青年が障子をゆっくりと閉める。男は再びパイプに口をつけた。

「・・・百合」

男の纏っている着物の色は、藩主のみが纏える紅梅色。

「あんがい遠いのね。梔子って・・・」

心地よい籠の中で百合は呟いた。ここに来るまでの悪夢の記憶をたどる。

まず、一番最初の関所で引きとめられた。かけられた言葉は一言、『おまえは百合様の偽物であろう』

前もって百合が関所を通るのを知っていた役人数人に囲まれて百合は籠から這い出た。

『失礼ねっ！私は真正証明の百合よ！』

『嘘をつくな！百合様はそんな貧相な顔はしておらぬ！』

どうやら役人達の頭の中には、「將軍の正室Ⅱとても美人」という方程式が成り立っているらしい。

（こんの役人・・・）

それから猛烈な口喧嘩へと発展し、しまいには綾尉直筆の証明書が送られてくるまでの三日間、

百合は関所で夜を越したのだ。何ともバカけた話である。

ちなみに、百合は城から来たのがバレないように、在所を『松重』としてごまかしているのだ。

「まったく何よ！私ってそんなに貧相な顔してる！？たしか第一話で『百合はなかなかの女子おなじだった。』とかって書かれてたじゃないっ  
！！」

ドカドカと籠が揺れる。担いでいる護衛たちはギョツとした。

「ゆ、百合様、もうすぐ着きますからお手柔らかにい」

突然護衛の一人が、道端の地藏に向かって拝みはじめた。この一行、変態か。

そんな風に道行く人々に超不審な目で見られ続けること四時間。や

つと梶子の関所を通過した。

「つ、着いたゝ・・・」

達成感を味わおうと籠の外をのぞく。そこは、とても気持ちよさそうな畑と田が広がっていた。

（あんが いい 所じゃない。梶子って。）

だが、そう思ったのもつかの間だった。次第に妙なことに気付きはじめる。

（変ね・・・このへん、人が全くいない・・・）

そうなのだ。気持ちよさそうな田はあっても、全く人の姿がない。たまに通行人の農民が通りかかるものの、百合達を見るとさっさと逃げてしまう。

まるで土地全体が沈んでいるかのように。

しばらく無言で籠に揺られていると、視界に何かが入った。

よく見ようと身を乗り出すと、そこには女の人と子供が倒れている。

（！！）

足をけって揺れる籠から飛び出すと、女の人元へと護衛を無視して駆け寄った。

「大丈夫!？」

女の方は、かすかにうめき声を上げた。隣にいる男の子が泣き出す。

「うう・・・おっかさんが・・・」

「どうしたの、何があったの!？」

男の子はしゃくりあげながらも、震える声で訴えた。

「最近、僕の村の人が・・・一揆を起こして・・・みんな藩主様に殺されちゃって・・・」

百合は目を見開く。

「それで・・・食べ物みんな・・・なくなっちゃって・・・お腹すいたよお・・・」

さらに泣き出す男の子に、百合は懷から二つの塩むすびを差し出した。

そっと男の子の小さい手に握らせる。ここに来る途中、夢津美が作

つてくれた塩むすび。

「これ、食べなさい。お母さんにも食べさせてあげるのよ。あ、へたにうごかしちゃダメよ。村の人を呼んできなさい。」

百合の言葉にコクンとうなずくと男の子は立ち上がった。

「・・・ありがとうお姉さん」

「見てなさいよ・・・私がその藩主の頭かちわってやるんだから！」  
百合は大声で叫んだ。男の子はそれを聞いてあわてる。

「ム・・・ムリだよ・・・藩主様なんかにあえるわけないもん・・・」  
ニツと笑う。

「大丈夫よ。私は藩主に会えるから！」

男の子は目をパチパチさせた。

「お姉さん・・・何者・・・？」

再び籠に戻った百合はさらにドカドカと籠を蹴り飛ばす。

「藩主のヤツゝ民が苦しんでいるのに横流しなんかしてゝ！！」  
籠にピシッと亀裂が入る・・・

「絶対ゆるさないんだから！！」

さっきの男の子の話でこの土地の近状況は把握できた。問題は、横流し。

どうやって現場をおさえるかだ。うろちよろしていると逆に怪しまれる。

（一人じゃ・・・無理。誰か協力してくれる人がいないと・・・）  
考えていると、籠が急に停止した。

「百合様、ご到着です。」

護衛が声をかける。百合は丁寧にお礼をいうと、籠から外に出る。  
藩主の屋敷が目の前にそびえ立っていた。立派すぎる門構に一瞬たじろぐものの、拳を握りしめる。

（見てなさいよ。絶対に証拠をつかんでやるんだから——！。）

**一陣の風は地に舞い降りる（後書き）**

最近、投稿ペースがおそくなりすみません。  
私自身、非常になまけものなので・・・  
どうか暖かい目で見てください。

## 琥珀の月は闇夜に飲まれ

畑や田に囲まれて聳え立つ立派な屋敷。

その屋敷の頑丈そうな門に向かって大きく息を吸う。

三泊の間ののち、

「たのも——っ!!」

百合の大声が辺りにエコーする。その大声は門をも突き抜け、屋敷の中の人々までもが反応した。

何かちがう、絶対何かちがう、と思いつつも護衛の男達は百合に声をかけた。

「百合様、我々がお供できるのもここまででございます。後は百合様の無事を祈ります。」

「え・・帰っちゃうの? 何だかさびしいわね。」

内心、『早く別れてえ!!』と思っていた護衛たちは顔の筋肉を無理やり引きつらせる。

「いえいえ。それでは、頑張ってください。」

護衛たちはなぜか猛スピードで帰っていく。いや、もはや逃げているといってもいいだろう。

「???」

猛スピードで帰っていく原因が自分にあるとも知らず、百合は首をかしげる。

そして、その直後のことだった。ゆっくりと屋敷の門が開いたのは。

『ギギギギ・・・』という音をたて、門から現れたのは一人の若い男。綾尉と同年代ぐらいだろう。

一瞬、とまどったが、すぐにあいさつをする。

「こんにちは。私はここの屋敷の新しい女中、百合と申します。」  
自分の中ではパーフェクトな笑顔だ。

すると、男はそれにつづいてニッコリと暖かい微笑を浮かべた。笑

うとなかなかの顔立ちである。

「百合さんですね。こんにちは。僕はこの屋敷の主の息子、伺龍しりゅうです——」

『ドッカーン!!!!』

「!?!」

次の瞬間、伺龍は門の段差につまづき、みごとに顔面から地面に落ちた。

（な、何かしらこの人・・・初対面でいきなり地球と仲良くなったケド・・・）

事態を飲み込めていない百合は、ゆっくりと立ち上がる伺龍をぼうぜんと見ている。

「あ・・・あの・・・大丈夫？」

「いえいえ、いつもからこんな調子なので・・・」

訳が分からない。『この屋敷の主の息子』ということは『藩主の息子』ということだろう。けれどなぜこんな人が門番になってあげくに地球と仲良くなっているのか。

「あ・・・あなたはお父様のそばで仕えているんじゃないの？何でこんな家臣みたいなことを・・・」

その質問をきいた伺龍の顔が曇る。

「いいんですよ。お父様は兄上ばかり気にかけていて、僕のことばかりともななんですから。」

「兄上・・・？」

「僕より五つ上の聯兄上れんのことです。」

この時百合の頭の中はフル回転中だった。伺龍の兄上が藩主に仕えているのなら、横流しにもその兄上が関わっているのだろうと。

（こんなにあっさり情報が入るとはね・・・）

気づかれないように拳を握りしめる。伺龍は何かを振り払うように顔を上げた。

「百合さん、まずは父上に挨拶に行きましょう。さあ、こちらへ。」



荷物を持ってくれる。百合がありがとうと言いかけた時、彼はまたしても段差につまずき、地球と仲良くなったのだった。

百合はまず城といい勝負ほどの長い渡り廊下を歩かされた。

ギシギシときしむ古びた廊下を踏みしめながら、藩主の元へ。

ちなみにこの廊下を渡っていた間に伺龍は23回もコケていた・・・

（伺龍のドジ度は底なしね・・・）

あきれてそう心の中で呟いたと同時に、見るからに立派な障子の前に到着する。

「ここは客人などを通す部屋です。さあ、どうぞ。」

小声で呟き、伺龍は障子を開けた。

その途端、視界を煙が覆う。

煙の出所を目で追うと、藩主らしき男のパイプに。

（あああああきれたあっ！何て奴なの、客人の前で平気で煙管を吸うなんてえっ！）

怒りのこもった足をドオンと畳に叩きつけ、歩を進める。

そんな百合を見て、藩主の隣に正座している数人の女中がヒソヒソと話し始めた。

どうせ品がない、などという内容だろう。

さすがの藩主もピクツと太い眉を上げる。

「お初にお目にかかりますっ。百合と申しますっ！」

かなり乱暴に頭を下げた。藩主の後ろに座っていた青年が立ち上がる。

「おぬし、藩主である我が父上に向かってなんたる無礼な！」

しかし、怒られても冷静に百合は頭を働かせた。

（今あの人、藩主である我が父上について言ったということは、あの人が伺龍の兄上の聯さんってことね。）

なるほどよく見れば伺龍と顔立ちがよく似ていて整っている。

ふいに、分析している百合に向かって藩主が声をかけた。

「百合とやら、自分の身分をわきまえろ。素直に私に頭を下げるのだ。」

その言葉を聞いた百合のこめかみに青筋が浮かんだ。グッと拳を握り締める。

「お言葉ながら、民一人さえ守れない藩主様にそう言われる筋合いはございません。」

その場の空気が凍った。伺龍は百合の後ろでオロオロする。

「・・・んだと」

その呟きは微かなものだったが、百合の耳にははっきりと届いた。

『バン!!』

急に藩主が扇を畳にたたきつけた。女中達がビクツと肩を震わせる。

「良いか、今日からお前は女子寮ではなく、男子寮で寝泊りしろ！」

伺龍、連れて行け。」

「は・・・はいっ！」

一瞬にして笑いに包まれた部屋を、伺龍と百合は荒々しく出ていった。（とくに百合）

「あくもおゝムカツクっ!!」

夜、布団をしきながら百合は叫んだ。隣にはもう一つ布団が。

「気をおとさずに・・・あれは父上の性格ですし・・・」

伺龍はニッコリと笑ったが、百合の怒りは収まらない。

「何が『男子寮で寝泊りしろ』よ！バカ藩主！！私は女よお——っ！！！」

そう。藩主の言葉のせいで、百合は二人一部屋の男子寮で泊まることになってしまった。しかも相手はよりによって伺龍。

今にも炎を乱射しそうな百合に伺龍はなすすべもない。

「ちよっとそこらへんの石を壁にぶつけてくるわっ！」

仕返しが低レベルすぎるだろ。と思ったが伺龍は無言だった。障子がものすごい勢いで閉まる。

百合はドタドタと暗い渡り廊下を駆け抜けた。両手にはたくさんの小石が・・・

「どこよ、藩主の部屋はっ!!」

搜索していると、一つだけ明かりの灯っている部屋が。百合は無意識にその部屋に接近する。

壁に耳をあてると、話し声がした。青年の声と、低い男の声。

「・・・これが今月の分でございます。」

「うむ。ご苦労だった。聯よ。」

チャリンと、何かが落ちる音。あの音は——小判！自然と百合の頬を汗がつたる。これは、もしかや——

「外部の輩にバレないようにしろ。梶子藩主が横流しなど、一発で斬首だからな。」

「!!!!」

綾尉の言う通り、横流しは本当に行われていた。

次の瞬間、百合は我を忘れ、夢中で闇夜の廊下を駆け抜ける。

月が雲に隠れ、闇はいつそう濃くなっていた。

**琥珀の月は闇夜に飲まれ（後書き）**

このごろ綾尉たちの出番がめっきりありません。

何とかして出したいのですが・・・

もう佐門とかも扱いがひどくなってきました。

私自身、本気で「あれ、こんな奴いたっけ？」と思いました。

がんばれ佐門！生きろ佐門！

## 新芽はやがて大木を追い越す

月がどんよりとした黒い雲の流れとともに飲み込まれていく。梶子藩主邸は、すっかり静まりかえっていた。ざあ、と春にしては珍しい冷たい風が吹いた。そんな静寂をギシギシときしむ古びた廊下の音が破る。

（伺龍、伺龍、伺龍——っ！！）

百合は必至に音を立てないように廊下を駆け抜けていた。心拍数が上がり、呼吸が乱れる。

まだ、信じられなかった。本当に横流しが行われているなど。

離れた寮がわりの部屋の障子を乱暴に開けた。

「ゆ、百合さん！？」

伺龍がなにごとかと目を見開く。

「何があったんですか、そんなに呼吸を乱して・・・」

「たい・・・へ・・・ん・・・よ・・・こなが・・・し・・・が・・・！！」

ゼエゼエと荒い息を吐く百合の肩を優しくつかむ。

「おちついてください、何があったんです？」

「そ・・・それが・・・」

百合は今までの出来事を丁寧に伺龍に伝えた。

話し終わった時の伺龍の反応が気になったが、以外にも冷静だった。

「そう・・・ですか。やはり・・・」

「伺龍、やはりってどういうことよ。」

百合の的を射抜いた質問に少しためらいがちだが、伺龍は瞳をふせると、ゆっくりと語りだす。

「実は・・・何年前に見てしまったんです。横流しの帳簿を。」  
驚いた。伺龍は知っていたのだ。

「僕が倉庫に向かった時のことです。父上と兄上が中で一つの本を

覗きこんでいました。」

「伺龍はなんで倉庫に？」

「学問の書物を読みたかったんです。僕の夢は、将来学者になることですから。」

関心しながら聞いた。まさかそんな夢を持っていたとは。

「それで・・・不思議に思ってからその本を見たら書いてあったんです。その、金額が・・・」

百合はうくと腕組をした。

「その倉庫はどこにあるの？」

「え、えっと、たしか兄上の部屋のずっと奥です。」

そうなると侵入はかなり困難だ。聯の部屋の横を突破しなければならぬ。

「ほかに、その倉庫に行ける道はない？」

伺龍は固い表情でしばらく考え込み、顔を上げた。

「僕の知っている範囲では、ありません・・・」

そう、と百合は呟く。

今、百合の脳内ではいくつかの考えが廻っていた。使えらとしたら

――

「伺龍、話があるの。ちょっと紙と筆持ってきて。」

さらさら、と筆を滑らせる。

二人の密談は、翌朝まで続いた。

一夜明けて、早朝。

紙に書かれた一、二、三案という文字の三案に筆で丸を書く。

「いい、分かった？ 決行は聯が私を呼び出した時よ。」

伺龍が大きく頷いた。

「ぜったい、横流しを止めます。」

その険しい決意の顔を見て、微笑を浮かべる百合。と、その時、女中の声が廊下に響いた。

「百合さん、聯様がお呼びですよ。」

元気な返事を返すと、頼んだわよ。と伺龍に耳打ち。

一人残った伺龍はポツリと呟く。太陽の光が彼を暖かく照らした。

「父上、兄上・・・」

彼は立ち上がると、こっそりと部屋を出た。

一方、百合。

「・・・は？」

目の前に気だるそうに座っている聯に吐き捨てる。

「だからいっただろう。屋敷の溝掃除をしろと。」

百合の体は怒りで震えていた。今すぐカウンターパンチをしそうな勢いだ。

辺りにいた数人の女中から笑いが起きる。

「君は、ここの屋敷の女中なんだからおとなしく私に従うんだな。」  
拳を振り上げる前に聯に腕を掴まれた。クスクスと笑う。

「とてつもなく気性が荒い女だ。」

顔が真っ赤になる。コイツ、本当にあの天然伺龍の身内か？

「・・・かりました」

ここでキレても恥をかくのは自分だ、と言い聞かせ、かなり無理やり返事をする。

部屋を出ると、掃除用具を片手に屋敷の溝へと向かった。

溝は変色してコケが生えており、辺りに異臭をまき散らせていた。

「あーもうっ！ やってやろうじゃない！！」

人一人分入れそうな溝に頭を突っ込む。

鼻を片手でおさえながら溝にはまっていた木の板を外すと、驚きの

混じった声を上げた。

「何・・・コレ!？」

じんわりとカビくさい臭いが倉庫の中を包む。伺龍は暗い中、手さぐりで本を探す。

百合達の作戦――それは百合が聯の注意を引きつけ、そのすきに伺龍が倉庫へ侵入するという単純なものだった。

一つ、本を引き出してみた。バツと、ホコリが舞う。

本の背表紙を見てみた。それは、国学に関する本。でも、中身は違う。

パラパラとページをめくり、中身を確認すると着物のあわせに本をしまう。

その時だった。ヒタヒタと、足音が響いたのは。

反射的に振り替える。そこには見慣れた父の姿。暗くて表情は分からないが。

「・・・やはりお前だったか、伺龍。」

伺龍は突きつけられた刀を見ても、無言だった。だが、一筋の汗が頬をつたう。

「父上・・・なぜ、ここに。」

「しらばっくれるな!」

刀が首へと移動した。首筋に浅い傷を作り、血が垂れる。

「お前の思い通りにはさせんぞ!」

刀が振り下ろされる。狭い倉庫の中、伺龍によけるすべはなく、刀は伺龍の腹を射抜いた。

『ガ・・・ハッ・・・!』

ぼたぼたと血が落ちる。それが自分の物だということに気付くまで数秒かった。



誤算だった。兄上のことばかり気にしていた伺龍たちは、父に対する対処を忘れていたのだ。

（百合さん――！）

心の中で絶叫した時、何かが倉庫の床下を突き破った。

『バキバキバキッ！！』

「な、何が・・・！？」

父は、次のセリフを言うことができなかった。刀と一緒にふっとばされる。

もくもくと立ち込める煙の中、百合は立ち上がった。

「私のカウンターパンチ、決まったわね！」

「！！」

激痛にも構わず、伺龍が立ち上がる。

「ど、どうして・・・それにその格好は！？」

百合の服装は、溝に入っただけのためボロボロでシミがついていた。

「ん？溝掃除しようと思って中に入ったら、何とこの部屋につづく通路があったのよ！！」

伺龍はあきれて声が出なかった。まさか溝の中に入るとは。

この発見は、百合しかできなかったであろう。

再び伺龍に激痛が走った。本を懸命につかみ、百合へと手渡す。

「これ・・・を・・・奉行所へ・・・」

百合の驚きの声とともに、伺龍の意識が途切れた。

一ヶ月後。

伺龍は百合を見送るために外へ出た。傷はだいぶ良くなった。前のように、段差につまずいたりはもうしない。

自分は梔子藩主だという誇りと自信を身に纏えたからである。

あの騒ぎの後、百合が二里先の奉行所へ帳簿を届け、父と兄はお縄に。

そして、次の藩主は伺龍に託された。

就任したときは軽蔑のまなざしで見られたものの、次第にそれも減ってきた。

今では、それが誇りに思える。

学問という道をあきらめ、藩主になったのは、民たちを救いたかったから。

梔子の地は、変わろうとしている。

伺龍はゆっくりと百合に歩み寄ると、頭を下げた。

「ありがとう。」

百合は目を白黒させたが、すぐに微笑む。

「頑張って・・・いい藩主になりなさいよ。」

伺龍は、どこか綾尉に重なるものがあつた。

頷く伺龍。だまって、百合が籠に乗り込むのを見つめる。

彼は思い出したように、百合に問いかけた。

「そういえば・・・百合さんは何者なんですか？ただの人じゃありませんよね・・・」

不思議そうに見つめてくる伺龍の唇に人指し指をあてる。

「・・・秘密。」

百合が將軍の正室だということを伺龍が知るのは、ずっと後になつてから。

## 新芽はやがて大木を追い越す（後書き）

伺龍、かなり好きなキャラです。

なので今回は伺龍を悪役にすることはどうしてもできませんでした。

あの天然さ・・ほしいゝ！！（作者バカ）

## 新たな命は芽生え（前書き）

龍皇神凜様と叶愛夢様のありがたいご指摘により、大編集その二をやっております。前の話を読み返すと、少しだけ変化をしています。

## 新たな命は芽生え

「・・・・・・・・・・は？」

百合は瞠目した。

いや、彼女だけでなく、その場にいた全員が。

☆

時は少し遡る。

梶子の地での隠密を終え、城に戻ってきて一週間。

梅雨入り間近の城は、どこか頼りなさげな空気を漂わせていた。

百合は腰に両手をあてると、目の前で寝そべっている将軍に声をかける。

「いいかげん起きなさいよ。もうお昼回ってるじゃない。」

「・・・・あと少しだけ寝させてくれ。」

綾尉はそう呟くと顔まで布団を被った。しかし百合は諦めない。

「起きなさいっていつてんの！」

布団を掴むと勢いよくめくり上げる。布団を奪われた綾尉はダルそうに起き上がった。

「私は疲れているのに・・・・」

「私の方が梶子行ってもっと疲れたわよ！」

ギン、と鋭い眼差しで睨みつける。と、そこに二人の人物が障子を開けて入ってきた。

「百合様、そのへんで終わりにしていただけません？」

「綾尉様が疲れているのは事実ですよ」

夢津美と蒼だ。

二人になだめられた百合は仕方なく睨むのをやめた。

「で、でもこのダルさは明らかにサボりたいのが見え見えよ。」

蒼は綾尉に視線を向け、まじまじと観察してから一言。

「五月病です」

今は六月の初めですけど、と心の中で密かにツツコミを入れる。

「綾尉様もお疲れなんですよ」

夢津美が笑顔で説得。さすがの百合でもこの『平和オーラ』には勝てない。

かばわれた綾尉にたちまち生気が戻る。

「そうだぞ、私は疲れているんだ〜!」

絶対疲れてないだろ、と百合は絶叫した。

「あゝもう休みたいのは私の方よ」

瞳を閉じてため息をつく百合を、元気になった綾尉が励ます。立場逆転だ。

「でも、本当に良くやったな、百合」

くしゃくしゃと頭をなでられる。百合の顔が僅かに赤面した。

そんな彼女を見て、夢津美がクスリと笑う。

「そうですね、あれから梶子は状況が一変しましたもの。以前は死んだようだった村も、今は野菜が良くとれたりと・・・特産物が増えました。」

百合の顔が輝いた。

「本当!？」

「ええ。」

「これも全部、百合様のおかげです。」

蒼の言葉に、胸がジーンとなる。ようやく自分に実感が沸いてきた。

「・・・私、やったのね・・・!」

「いきなり出てきてゴッメーン☆」

「ギャアアアア!？」

突如、佐門が登場。良い雰囲気は一瞬にしてぶち壊しだ。

(あゝあ・・・)

全員の心が一つになる。

「何しに來たのよ! いい所だったのに」

百合は佐門に向かい拳を一撃。しかし彼は年寄りパワー(?)でヒラリとかわす。

「興奮するな、我が孫よ」

ぶち切れそうになったが綾尉になだめられ、佐門の危機は去った。

「で、ほんと何の用よ!？」

せがまれた佐門は懷から一枚の紙を出すと、一目散に逃げ出す。

遠くから、「梔子の地からダヨ」と言う叫びが聞こえる。超近所迷惑だ。

「・・・年々アホになってるのは気のせいかしらね」

本音をぶちまけながら紙を丁寧に開く。綾尉達もその紙を覗きこんだ。

『百合さん、お元気ですか。あなたが行かれた後、僕は大規模な梔子土地開発を行いました。』

土地を調べると、野菜作りにうってつけであるということが判明し、農民達を集めて野菜作りの指導をしました。その結果、梔子は野菜の産地となりつつあります。農民達も皆大喜びでした。

今年は今まで以上の豊作となりそうです。これも全部百合さんのおかげです。本当に感謝しています。

そしてなんと、昨日嫁をもらいました。百合さんのような可愛い女ひとですよ。

では、これにて失礼させていただきます。

あ、ついでに言っておきますと、最近は一日に四十三回しか転んでませんよ！

梶子藩主 伺龍』

手紙ごしにも伝わってくる幸せそうな文章だった。下手な達筆で書かれた字を見て、微笑む。

どうやら松重の実家に送ったらしい。伺龍は百合が將軍正室だということは知らないからだ。

自分の選択は間違っていなかった。こうして多くの人々を幸せにできたのだから。

だが、微笑んでいる百合の隣で手紙を読み終えた綾尉はなぜか青い顔をしている。

「百合・・・この伺龍という男は誰だ・・・」

「誰って・・・梶子藩主だけど？」

不思議そうに綾尉を眺める。

「ここに、『百合さんのような可愛い女』<sup>ひと</sup>と書いてあるが、まさかお前、不倫を・・・」

「違——う！もう、そんなことするわけ・・・」

会話がプツリと途切れた。百合がゆっくりと頭を抑える。

「痛っ・・・！」

「百合様!？」

異変に気づいた夢津美達が駆け寄り、しゃがみこむ百合の顔を覗き込む。

「どうなさったのですか!？百合様、百合様!！」

蒼はあわてて障子を開け、医者呼びに走る。

綾尉はおろおろするばかりだ。



「頭が・・・割れるみたいに痛い・・・!!」

ついに百合は倒れこんだ。呼吸は荒く、顔は真っ赤だ。

「早く、医者を！」

夢津美が叫んだと同時に医者が駆け込んできた。あわてて荷物を下ろすと、検査の準備に入る。

「綾尉様は布団を敷いてくださいっ！」

蒼に怒鳴られ、ぎこちない手つきで布団を敷く。佐門もやって来た。

それからしばらくは、静寂が続いた。皆、布団に寝そべり荒い息を吐く百合を見守った。

時おり、医者が機材を動かす音が響く。

その音が止んだころ、ゆっくりと医者がこちらを振り返る。只ならぬ気配を感じた綾尉達は身を乗り出した。

「百合は・・・!？」

医者は顔を背け、ためらいがちに目を閉じた。

辺りの空気はピンと張り詰め、今にも切れそうだ。

「おめでとうございまする」

その言葉で、辺りは再び騒然となった。

「何がめでたいのですか!？こんなに苦しそうで・・・」  
夢津美の泣き声が混ざった声は医者によりさえぎられる。

「子じゃ。赤子ができたのじゃ。心配するでない。」

沈黙が訪れる。この世界中の時間が停止したかのように。苦し紛れにも関わらず、それを聞いた百合の口が開く。

「・・・・・・は？」

それは、百合だけでなく、その場にいた全員の心の中にあるただ一

つの言葉だった。

## 四神の化身

百合が城に来てから二回目の冬が訪れようとした時だった。冷たい冬風が城の庭に生えている木々を揺らす。そんな時、城の中は大騒ぎだ。

「百合様にお子ができたそうなの！」

「しかも今生まれたという話です！」

「どうやらお子は男君だそうで！」

バタバタと百合の部屋に続く廊下を女中たちが駆け回る。そして夢津美が八十七回目の水くみに行った時だった。赤子の産声が上がったのは。

それにいち早く反応した夢津美は慌てて廊下を引き返した。

「ゆゆゆゆゆ百合様あああつ！！」

障子を開ける。視界に飛び込んできたのは赤子の姿。

「…夢津美…泣きすぎ…よ…」

ハアハアと息を吐く百合の背中を勢いよくさする。

「百合様あ…よかった…本当に…」

涙と鼻水でグチャグチャの夢津美に向かって微笑を浮かべる。

「これで、ようやく休めるのね…」

汗をダラダラ流した百合は力つきたように布団へと崩れ落ちた。夢津美は生まれたばかりの赤子の体を丁寧に洗っている。

「…まあ、何と可愛らしい…」

小さいものの、そのハッキリとした瞳は百合似である。

（この子が将来、この国を背負うんですね…）

元氣よく泣き声を上げる赤子を優しく抱きとめる。

そんな時、勢いよく障子が開き、綾尉達が転がり込んで来た。髪は恐ろしいほどに乱れ、着物は着くずれてヨレヨレだ。

「あああああああああ赤子は…っ!？」

「ここですよ」

呂律が回らなくなった綾尉は赤子を見たたん、ヘナヘナと畳に手をつく。

「こいつが…我が子…」

夢津美はゆっくりと赤子を差し出した。

「抱いてみてはいかがですか？」

「う、うむ…」

若干不安げに赤子を受け取る。ダラーンと首が垂れた。

「うっきゃあああああああ!！」

「綾尉様、心配しなくても大丈夫ですって!」

爆笑した。叫びすぎだろう。

「思えば…あの日から数カ月ですか」

苦笑する蒼は遠くを見つめた。

百合に子ができたと分かった時、全員あんぐりと口を開けた。それは本当か!？と。

でも、だんだん大きくなっていく百合の腹を見て誰もがすべてを理解した。そして、今日――  
ようやく赤子が誕生した。時期に將軍となる子供を。

抱くの慣れてきた綾尉は眠っている百合に視線を向けた。

「百合…頑張ったな」

場の雰囲気祥和。赤子は泣くのを止め、うとうとと眠りにつく。

「私は、この子供とともに、この国を――」  
最後の呟きは、小さすぎて誰にも聞こえることはなかった。



はらはらと雪が舞い降りる。縁側で子供を抱く百合の隣に、綾尉は腰を下ろした。

「百合、もう体調は大事なのか？」

百合は舞い降りる雪を目で追いながら笑った。

「ええ、すっかり元気よ、じゃないとこの子と遊べないじゃない」  
綾尉も微笑を浮かべる。異様な静けさの中、赤子は母に抱かれてご機嫌だ。

しばらくの間、静寂が続いた。雪はさらに降り積もる。

「……一年、ね」

ふいに百合が口を開いた。綾尉が不思議そうにそれを眺める。

「何がだ？」

綾尉の問いかけに目を閉じる。

「……この城に来てからよ、色んなこともあったけれど……楽しかったわね」

そう。早くも百合がこの城に来てから一年が経とうとしていた。  
この一年……本当に波乱万丈だったけれど、それでも楽しかった。

実家、松重での戦いで撒を亡くし、檜皮の乱で綾伽が逝った。

自分は、色々な人の命を踏み台にして生きているのだと、感じた。  
それは申し訳ない気分にもなったが、誇らしくもあった。

そして、将軍が綾尉に変わり、この国は安定した。

雪の中に、一瞬だが亡くなった人達が見えた気がした。

そんな中、綾尉は口を開いた。

「なあ、百合、その赤子の名前は決めたか？」

少しの間ののち、コクンと頷く。綾尉は先を促すようにそれを見つめる。

「青竜<sup>せいりゅう</sup>…ってどうかしら。」

思いもよらない名前に首をかしげる。

「その由来は…」

「四神の一つよ、神様の名前」

二人は、青竜を眺めた。

「父上から文が来たの、男の子は『竜』っていう名前が入っているとかっこいいって」

雪が、はらはらと舞った。

「それで決めたわ、この子は将来この国を背負う神、だから青竜」  
綾尉は、優しい笑みを浮かべる。

「私も、それに賛成…だな」

二人が会話をしていた時も、雪は途絶えることなく舞っていた。明日は積もりそうだ。

この時、彼女達は青竜と人生を共にすることを誓ったのである。

## 四神の化身（後書き）

あと一話でこの話は完結予定です。

長々と私のこの物語につきあっていたいただきありがとうございました。  
ラストスパートに向けて最後の頑張りです。

## 百合の花は永遠に咲き

あの、青竜が誕生した日から、四十年の月日が流れた。

城の人々はだいたい入れ替わり、新たな政治が始まろうとしている。  
この第八代将軍、青竜の元で。

青竜は迎えたばかりの正室と一緒に、母の場所に向かっていた。  
廊下を渡り、母の部屋の障子を開ける。

「おお、青竜か」

すっかり年老いてしまった声を響かせ、百合は仏壇から顔を上げた。  
この仏壇は、五年前に逝ってしまった夫のもの。

「母上、こちらが嫁となる紅<sup>べに</sup>です」

綾尉に良く似た顔つきの青竜は一步さがると、紅を中に入れた。

「紅でございます、よ、よろしくお願いいたします」

緊張で顔がこわばった紅に、優しい微笑を浮かべる。

目の前にいるのは、四十年前の自分だ。

「…紅とやら、ほんにおぬしは私の嫁入り時代のころに似ておるの  
お」

紅の緊張は今の言葉でとけたようだ。自分に向かって身を乗り出す。

「ほ、本当でございますか？母上様の話を聞きとうございます！」

「これ、紅、口を慎め」

注意する息子に首を振る。

「いいんじゃないよ、青竜、さて、私の昔話をするとするかのう」



目を輝かせる紅の前までおぼつかない足取りで向かうと、腰を下ろす。

「四十年前のことじゃ」

百合は語りだした。

号泣した紅を引きずって帰る青竜に別れを告げると、縁側に腰を下ろす。

「あの日から、四十年――」

雪で染まった庭を、遠い目で見つめる。

嫁入りは断固反対だった。

城になど行きたくなかった。

松重で気ままに暮らしたかった。

子供だった自分は、そう言って首を横に振った。

だが、自分は間違っていないかった。城こゝろに来て正解だった。

形を持たない『何か』を手に入れることができたから――

それは決して金で買えないもの。

波乱万丈だった人生も、ようやく安泰した。

その間に、沢山の愛する人達を失ってしまったが。

父上、お千、佐門、夢津身、そして綾尉。

皆、最後は笑っていた。  
楽しかったと言ってくれた。  
だから自分は泣かなかった。  
愛する人はいなくなっても、残るものがあつたから。

「私も……」

そろそろかのう、と言いかけてやめた。

遠のく意識の中、冬の風が舞う。そしてその風が吹き終わった時、  
彼女は目を閉じた。  
長かった道も、終わる。  
そして彼女は眠りについた。目覚めることはない、永遠とわの眠りに――

☆

一面、光だった。

淡い輝きを放つ光の中を進んでいる。

それは、不思議な感じだった。だが、妙に心地が良かった。

ふと、自身の手を見る。

歳をとっていくとともにできた皺は消えていた。少女の手だ。そう、  
あのころの手。

顔も、体も、四十年前に戻っていた。『百合』だったところに。

前方に人影が見えた。それは懐かしい、最愛の人。  
彼も昔と変わらない鮮やかな微笑を浮かべて。

手を差し伸べられた。言葉はない。

彼女はゆっくりとその人を見つめる。あのころのままだ。その瞳は。優しく、笑ってみた。手をのばす。

二人の手が重なった。暖かい温もりを感じとる。

彼は、その唇をそっと開いた。名前を呼ばれる。

『……………百合』

完

## 百合の花は永遠に咲き（後書き）

終わってしまいました：『姫君は波乱万丈』  
本当に波乱万丈だった百合の人生も幕を閉じましたね。

感想をくれた皆様、読んでいただいた皆様、ありがとうございます。  
た。

初めて書いた百合達の物語、最初はなることやらと思いました  
がここまで来れて良かったです。感動です。

これも読んでいただいた皆様のおかげです、本当にありがとうございます  
いました。

一回、全部書きあげたのに間違えて全部消してしまった、などのハ  
プニングも起き、自身喪失した私でしたが、何とか立ち直れて良か  
ったです……

と、いう私のアホ話はおいておきます。

現在、次の話も執筆しております。

近々更新する予定なのでそちらも読んでいただけたら幸いです。

舞台はまたもや戦国から江戸にかけてです。

また、姫君とはちょっと違った話になりますが。

長々と書いてしまいました。最後までおつきあいいただき恐縮です。

では、また次の物語でお会いしましょう。

浅葱恵莉

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4654g/>

---

姫君は波乱万丈

2010年10月11日15時55分発行